昭和女子國文讀本　卷五

375.9
H019
資料室

42247
教科書文庫
4
810
42-1928
200030
1904

昭和三年十二月十八日
文部省檢定濟
高等女學校國語科教科用

保科孝一編

昭和女子國文讀本

東京　合資會社　育英書院發行

資料室

375.9
H019

高女第三學年
上原寿栄

廣島大學圖書之印

廣島大學教 39350 圖書

昭和女子國文讀本　卷五

目次

一　船の旅……九條武子……一
二　花影の中に……田山花袋……七
三　太郎の家その一……島崎藤村……一六
四　太郎の家その二……二四
五　山の中で……千家元麿……三四
六　廢園の薔薇その一……佐藤春夫……三七
七　廢園の薔薇その二……四二

八　フランスの旅……永井荷風……五〇
九　小泉先生の舊居……厨川白村……六〇
一〇　信濃路の旅その一……正岡子規……六八
一一　信濃路の旅その二……七四
一二　大井川……淺井了意……八一
一三　浮島が原の對面……（義經記）……八七
一四　平家と太宰府……田山花袋……九〇
一五　空行く雁……（曾我物語）……九九
一六　小蛇の疵……新井白石……一〇七
一七　村岡局……（日本の婦人）……一一〇
一八　紀三井寺へ……荻原井泉水……一二〇

一九　ゆふべの濱……西條八十……一三一
二〇　製紙工場その一……北原白秋……一三三
二一　製紙工場その二……一三七
二二　上高地の靜境……一四三
二三　綠蔭閑話……相馬御風……一五六
二四　赤楊の家……前田夕暮……一六九
二五　世界の歌枕……上田敏……一七九

廣島大學圖書之印

昭和女子國文讀本　卷五

一　船の旅

幾條(イクタ)ぞ、五色の絲紙春風に靡く。別れかねたるきづなとや、海の人、陸の人、手に手に持ちかはせど、あはれいづこまでか續くべき。われはかりそめの旅なれば、さる心もなう、手に餘る花の中より、白き薔薇、紅のチューリップ、一つ一つ拔きては拋(ナ)げつ、興ずるも心かろしや。

汽笛は裁(サバ)きの聲の如し。響き消えやらぬ間に、はや伏見

丸は、横濱の岸壁をはなれはじめぬ。術もなう切れゆく絲紙よ。目出度き鹿島立ちする人には、さながら大鳳の尾とも覺えて、春風になびきもつるゝに、また萬歲の聲水を渡りてしたひ來る別離の情、かくてこそ船出の心地また

なくふかけれ。

Bデッキのわが船室は、廣く心地よげに清められてあるに、ましてわが友より送られし花籠の蘭の花かをりこもりて、かりそめの主人を待ちてあり。

たまはりし花ことごとくわが好む
色と香をもてみちみてりけり
おくられし花ゆゑにこそ幾千里
われはも旅にゆく心地する

伊豆も遠江もまた富士も、雲多くして見えずときゝながら、船すこしく動くに部屋にのみこもる。

船はいま瀨戸の内海を、霞こめたる島より島に進む。微動だになし。

いゆるがす霞の中に吸はるゝ時

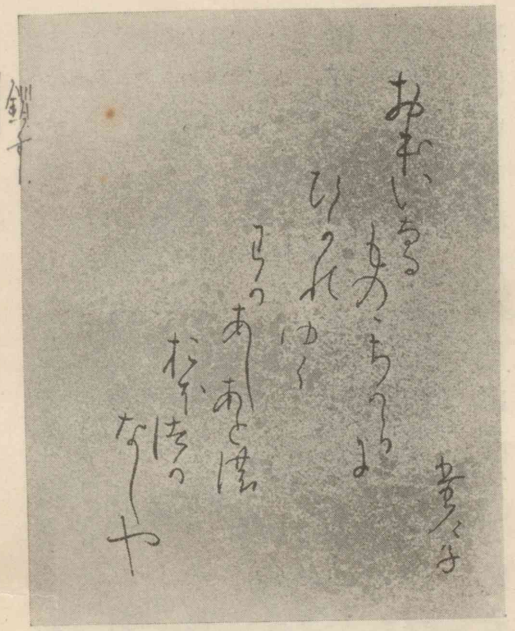
この大船も花びらのごとし

老いたる母は、「かくも靜なる船の船としも覺えず、ホテルに入りて食事する心地す。」と云ふ。夕霞いや濃やかになるあなた、夕陽仄かにおちて、海の風ある程ならねども寒し。雲ゆききして月又見えねば、戸をさして、宵なれども船室に入る。

うち見渡す山の櫻は、門司の方多かり。花見ずしていで

筆蹟　たけ子　おほいなるも　のちからに　ひかれゆく　があしあとの　おぼつかなし　や

門司　豐前國、下關と相對す



九條武子の筆蹟

博多　福岡縣那珂郡の西北海邊

香椎の宮　筑前國糟屋郡香椎村にある神功皇后を祀る

筥崎の宮　筑前國糟屋郡筥崎町にある、應神天皇、玉依姫命、神功皇后を祀る

ひゞきの灘　長門國の西北に位す、玄界灘に連なる

しを、筑紫は春も早うてか、上陸して幾時のあと、博多驛に下車すれば、ゆくりなくもN夫人にめぐり合ふ。うれしさよろこばしさ、手とりかはせど、とみに何の言葉もいでず。つれ立ちてともに花を尋ねぬ。

さきつ年、后（キサイ）の宮のいでましし香椎の宮の綾杉、筥崎の宮の廣前にむれあそぶ御使の鳩の瞳、西公園の花と人、春半日の思ひたりて歸船す。夕潮早き海峽に陽も淋しう入りぬ。

門司を出でて、名におふ（負）ひゞきの灘も波の音打ちねぶれり。なにがし教授、海圖もちいでて見せらるゝに、船長の「今はこのあたりぞ、今宵七時過ぎなば壹岐・對馬の間を通

コース航路

ソシャルホール談話室

りぬべし。など、明日のコースまで指しつゝ語らふを、おもしろうそばにて聞く。お茶の後、ブリッヂより船底まで、案内乞ひてゆき見る。兩國の橋よりも少し長しと思ふこの船を、安らかに動かす二つのシャフトの長くかつ大きなる、城塞の如きボイラー、壓せらるゝエンヂンの響。花やかなるソシャル、ホールの椅子に、ふか〳〵と身を拋げよする君達、一度見たまはばとおもふ。

あこがれの夢まどかなる人知るや
この船底の鐵と火と水を
眞西さしてゆく船のマストは、落ちてゆく陽を二つに分けてすゝむ。

玄界の灘　福岡縣糸島郡の北洋

九條武子　九條良知男爵夫人　歌人　昭和三年歿、年四十二

金剛山　大和・河内の境にそびえる山

吉野　大和國吉野郡吉野村山中の總稱

六田の渡し　吉野村と對岸の大淀村とを通ずる渡

沈む日をまむかうにして船すゝむ
わがふねすゝむ金色の國に
玄界の灘に落ちゆく紅の
大き夕日にまむかひ立てり
しみ〴〵と一日の終をあきらかに
さへぎりもなくおくりけり今日

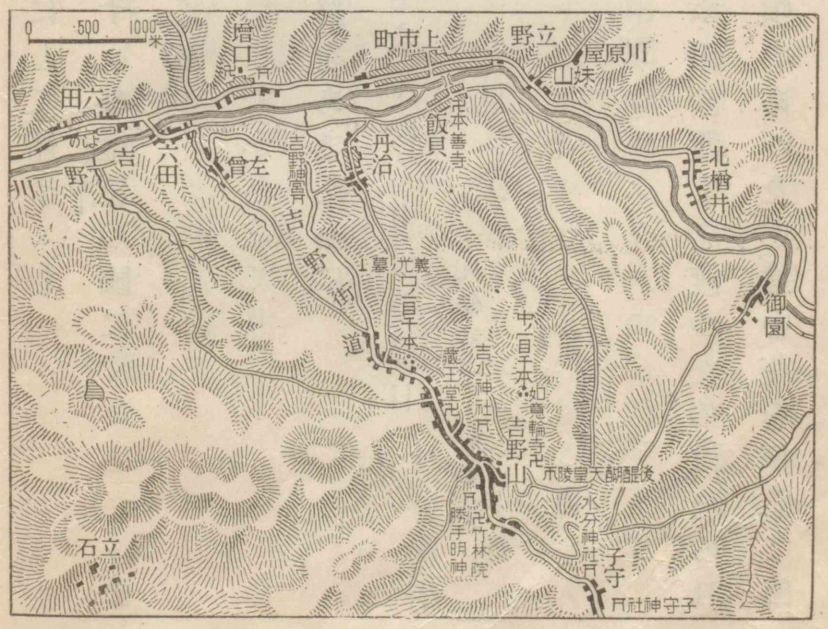
（九條武子―無憂華）

二　花影の中に

金剛山を越えて、吉野の六田の渡しを渡つたのは、その日の午後四時少し過ぎた頃であつたが、途中、花を挿して歸

つて來る人々に聞いて見ると、花は今眞盛りだとのことで、今一日早くても遲くても滿開を見ることは出來ないとの話であつた。漸く六田の柳の渡しのほとりに來た頃は、夕日がもう彼方の山の凹處に沈まうとして、淸い速い吉野川の流は、閃々と美しい紋

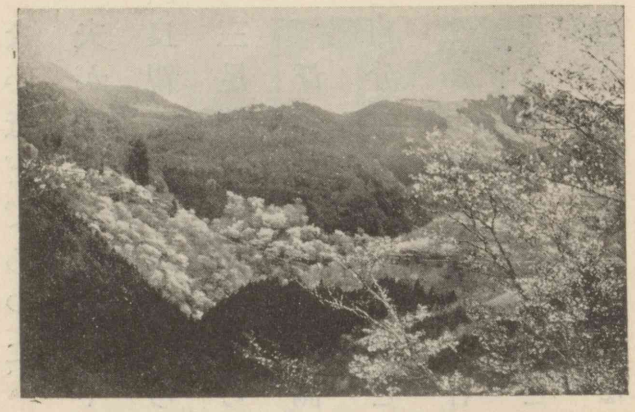
柳の渡し　六田の川岸に柳が多いので、かく呼ぶ



街　吉野村の人家の連つた通りをいふ

を川の面に描いてゐた。自分は船が前岸に着くと、そのまゝ急いで飛下りて、一直線にその懷しい吉野山へと志した。

街（マチ）の外れに一つの黑い門があつて、此處から奧の院まで六十餘町と書いた札が立ててあるが、その門を潛るともう山で、櫻の花がだんだん路の兩側に見え出して來た。入口は盛りが過ぎて、花瓣が枝に殘つてゐるのは極めて少ないが、次第に登れば登るほど、花は多く盛りになつて、四邊



吉野の花

護良親王　後醍醐天皇の第三皇子

十津川　大和國吉野郡南部の郷名

千早　河内國南河内郡、金剛山の一分、楠木正成が城を作つて王事につくした

赤坂　千早の西麓

の眺望の美しさは、殆ど言葉にも筆にも盡すことが出來ないほどであつた。右手には、越えて來た金剛山が、偉丈夫が端坐してゐるやうに聳えてゐた。それを仰ぐと、護良親王が十津川から此の地に入つて、千早・赤坂とともに三足鼎立の勢を作られた時のことなどが、すぐ胸を衝いて浮んで來た。兩側の花はいよ〳〵美しかつた。

自分は、行く〳〵右と左の大澤を見下しながら、夕日の花やかな光の、ぱつと谷間々々の櫻花の上に匂ひ渡るのを見て、獨りつく〴〵とこの山の景色のいかに懷古の情を起すのに適してゐるかを思つた。花も好い、境も好い、山も面白い。けれども、吉野朝の遺跡がなければ、決してこ

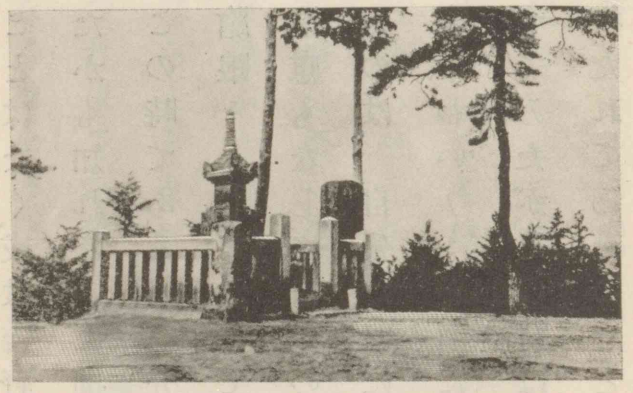
村上彦四郎義光　元弘三年、護良親王に代つて吉野で戰死した

片岡八郎　護良親王の侍臣

玉置山　吉野郡にある山

れほどの感興を起しはしなかつたであらう。

村上彦四郎義光の墓の前に跪いた時には、自分は何ともいへない悠久な感に打たれて、暫しは其處を立去ることが出來なかつた。前には片岡八郎があつて、親王の難を玉置山に救ひまゐらせ、後にはこの彦四郎義光があつて、身を以てこの吉野の退口を安全に守りまゐらせたのであるが、若し後年に至るまでこの忠勇無二の義光が生きてゐたら、親王



村上義光の墓

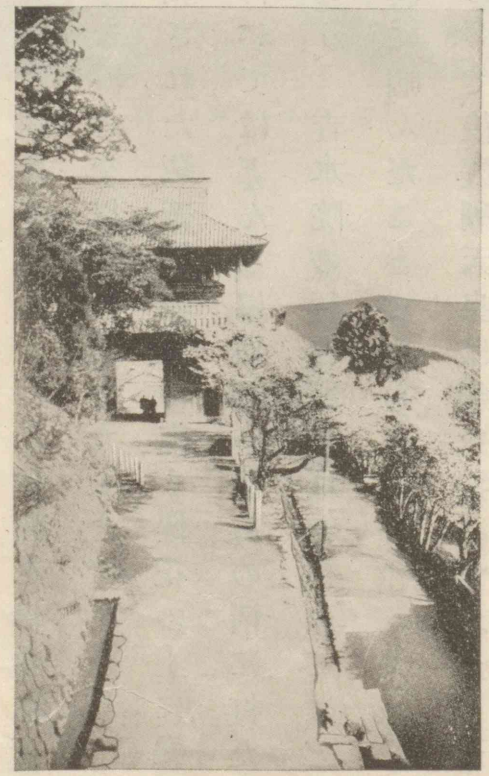
は決して鎌倉ではかない最後を遂げさせられるやうなことはなく、或は吉野朝の衰へを恢復されることが出來たかも知れない。　拙いのは吉野朝の運命であつた。

この時である。　自分の立つてゐる傍を、一群の醉客が蹌蹌々として歩いて來て、そして、卑しい歌を歌ひながら、遠慮もなしに自分の肩を掠めるやうにして過ぎて行つたのは。　自分は既にこの山に登つた時から、心ない花見客のわい〳〵と酒に醉つて歩く樣を非常に快からず思つてゐたが、その時はちやうど、自分の心が無限の感慨に打たれてゐたこととて、一層深く憤慨して、罵倒してやらうかとさへ思ふほど癪に障つた。

けれども、花の穩に咲匂つてゐる間を、一歩二歩と辿つて行くと、その癪に障つた念は一種の深い〳〵悲哀の情に變つて、どうにもかうにも堪らないやうな心地になつた。　王藏堂

と思ふと涙が

はら〳〵とやつれ果てた旅衣の袖を傳つて落ちた。　そして、草莽の孤臣といふ感が胸も狹しと溢れて來て、自分も若しその時代に生れてゐ



たら、たとひ雜兵となつてでも、必ず勤王の志を致したであらうにと思つた。

其處から吉野の奥の院までは五十町、この間を自分はどんな感慨とどんな涙とを以て行過ぎたことであらう。

護良親王の奮戰された藏王權現堂の高く櫻花の上に聳えてゐるのを仰いでは、どんなに烈しい懷古の情に打たれたことであらう。

藏王權現堂　吉野の金峯山寺の本堂

吉水院　今後醍醐天皇と楠木正成とを祀る吉水神社がある

吉水院の行在所の址を尋ねては、どんなに深い暗涙に咽んだことであらう。

こゝで、この花の中で、後醍醐天皇は劍を按じておかくれなされたのである。こゝで楠木正行は一首の歌を扉の上に殘し、死を決して敵軍に向つたのである。こゝで吉

野朝五十年の帝業が建てられ、正義の精神は赫々として光を日月と爭つたのである。

吉水神社

そしてその六百年前の夢の跡は、今でもやはり美しい滿山の花影の中に、微に匂ふばかりに殘つてゐるではないか。これほどの美しい詩が他にあらうか。自分は幾度もかう思つた。

自分はかういふ風に吉野朝の遺跡を處々に見て、一層深くこれに對する同情の念を增した。そして翌日吉野山を下る時

には、幾度となく振返つて、殆ど別れがたい思をした。

（田山花袋―花袋紀行集）

田山花袋　名は錦彌　小說家

遠い山地　長野縣の作者の故郷をさす

太郎　作者の長男の假名

三　太郎の家　その一

遠い山地の方に出來かけてゐる新しい家が、私達の間に噂に出ない日はなかつた。私は、鄉里の方に賣物に出た一軒の農家を、太郎のために買つたからである。それを峠の上から村の中央にある私達の舊家の跡に移し、前の年あたりから大工を入れ、新しい工事を始めさせてゐた。太郎も既に四年の耕作の見習を終り、雇ひ入れた一人の婆やを相手に、まだ工事中の新しい家の方に移つたと知らせて來た。彼もどうやら若い農夫として立つて行けさうに見えて來た。

次郎・三郎・末子　作者の子どもの假名

一體、私が太郎を田舍に送つたのは、もつとあの子を強くしたいと考へたからで、土に親むやうになつてからの太郎は、だん〳〵自分の思ふやうな人になつて行つた。それでも私は、遠く離れてゐる子の上を案じくらして、自分が病氣してゐる間にも、一日もあの山地の方に働いてゐる太郎のことを忘れなかつた。鄉里の方から來る便りは、どれほどこの私を勵ましたらう。私はまた、次郎や三郎や末子と共に、どれほどそれを讀むのを樂みにしたらう。さういふ私は、いまだに都會の借家住居で、四疊半の

書齋でも事は足りると思ひながら、自分の子のために永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行爲だと考へたこともある。けれども、これから新規に百姓生活に入つて行かうとする子には、寢る場所、物食ふ爐邊、土を耕す農具の類からして求めてあてがはねばならなかつた。

私の四疊半に置く机の抽出の中には、太郎から來た手紙や葉書がしまつてある。その中には、「もう麥を蒔いた」としたのもある。「工事中の家に移つて、障子を張り唐紙を入れして見たら、まるで別の家のやうに見えて來た」としたのもある。「これが自分の家かと思ふと、何だか恐しいやうな嬉しいやうな氣がして來た」としたのもある。「誰に氣兼ねもなく、新しい木の香の爐邊にあぐらをかいて、飯をやつてゐるところだ」としたのもある。

ふとしたことから、私は手にしたある雜誌の中に、この遠く離れてゐる子の心を見つけた。それには父を思ふ心がよせてあつて、いろ〳〵なことが細々と書きつけてあつた。「四人の兄弟の中での長男として、自分は一番長く父の側にゐて見たから、それだけ親しみを感ずる心も深い」としたところがあり、それから又、「父の勸農によつて自分もその氣になり、今では鍬を手にして田園の自然を樂む身であるが、四年の月日も空しく過ぎて行つた。これ

からの自分は、新しい家に居て新しい生活を始めねばならない。時には、自分は土を相手に戰ひながら、父のことを思つて涙ぐむことがある。」としたところもあり、その中には又、「父もこの家を見ることを樂みにして、鄕里の土を踏むやうな日もやがて來るだらう。寺の鐘は父の健康を祈るかのやうに、山に沈む夕日は何かの深い暗示を自分に投げ與へるやうに消えてゆく。」としてあつたのを覺えてゐる。

最近に、また私は太郎からの葉書を受取つてゐた。それによつて私は、あの山地の方に出來かけてゐる農家の工事が、風呂場を造るほど捗つたことを知つた。何となく

鑿や槌の音の聞えて來るやうな氣もした。こんなに私にも氣分の好い日が續いて行くやうであつたら、折を見て、あの新しい家を見に行きたいと思ふ心が動いた。

四月に入つて、私は鄕里の方に、太郎の新しい家を見に行く心支度を始めてゐた。いよ〳〵次郎も私の勸めを容れ、都會を去らうとする決心がついたので、この子を鄕里へ送る前に、私は一足先に出掛けて行つて來たいと思つた。留守中のことは、次郎に預けて行きたいと思ふ心もあつた。日頃家にばかり引籠り勝ちの私が、こんなに氣分の好い日を迎へたことは、家のものを喜ばせた。

「ちよつと三人でじやんけんして見ておくれ。」

と、私は自分の部屋から聲を掛けた。氣候はまだ春の寒さを繰返してゐた頃なので、子供等は茶の間の火鉢の周圍に集つてゐた。

「おい、じやんけんだとさ。」

何か好い事でも期待するやうに、次郎は弟や妹を催促した。火鉢の周圍には三人の笑聲が起つた。

「誰だね、負けた人は。」

「僕だ。」

と答へるのは三郎だ。

「じやんけんといふと、いつでも僕が貧乏くじだ。」

「さあ負けた人は、郵便箱を見て來て。」

青山
東京市赤坂區

と私が言つた。

「もう太郎さんから、何とか言つて來てもいゝ頃だ。」

「なあんだ郵便か。」

と、三郎は頭を掻き〳〵、古い時計の掛つた柱から鍵をはづして、路次の石段の上まで見に出掛けた。

郷里からの便りが、それほど待たれる時であつた。

この旅には、私は末子を連れて行かうとしてゐたばかりでなく、青山の親戚から、兄嫁に、姪に、姪の子供と、三人まで同行させたいといふ相談を受けてゐたので、いろ〳〵打合はせをして置く必要もあつたからだ。待受けた太郎からの葉書を受取つて見ると、「四月十五日頃に來てくれ

るのが一番都合がいゝ、それより早過ぎても遲過ぎてもいけない。まだ壁の上塗もすつかり出來てゐないし、月の末になると、また農家はいそがしくなるから」としてあつた。

四　太郎の家　その二

やがて、四月の十三日といふ日が來た。いざ旅となれば私も、遠い外國を遍歷して來たことのある氣輕な自分に歸つた。古い鞄も、古い洋服も、またそのまゝ役に立つた。連れて行く娘の支度も出來た。そこで出掛けた。この旅には、私はいろ〳〵な望を掛けて行つた。長い支

恵那山　美濃國恵那郡にあつて、木曾川に近い山

度と親子の協力とから出來たやうな新しい農家を見ることもその一つであつた。七年の月日の間に數へるほどしか離れられなかつた今の住居から離れ、あの恵那山の見えるやうな靜な田舍に身を置いて、深い溜息でもついて來たいと思ふこともその一つであつた。私の側には、三十年振で鄕里を見に行くといふ年老いた兄嫁もゐた。姪が連れてゐたのは、まだ乳離れもしないほどの男の兒であつたが、すぐに末子に馴れて、汽車の中で抱かれたり、その膝に乘つたりした。それほど私の娘も子供好きだ。その兒は時々末子の側を離れて、母の懷をさぐりに行つた。

「叔父さん、ごめんなさいよ」。

と言つて、姪は乳房を小さなものにふくませながら話した。そんなにこの人々は氣の置けない道連れである。

「さういへば、太郎さんの家でも屋號をつけたよ」。

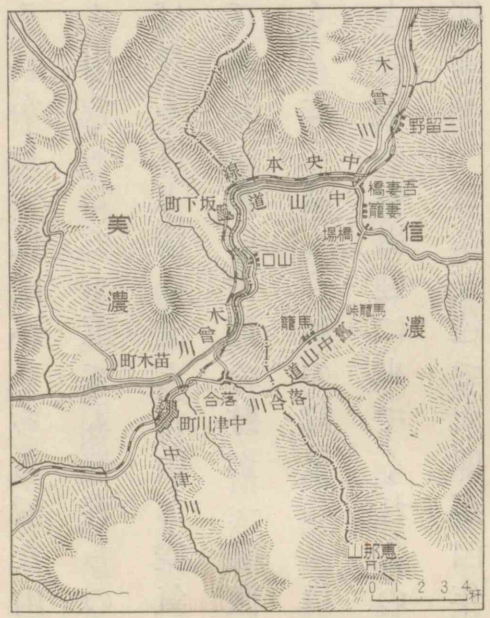
と私は姪に言つて見せた。

「みんなで相談して、田舍風に『よもぎや』とつけた。それを『蓬屋』と書いたものか、『四方木屋』と書いたものかと言ふので、いろ〳〵な說が出たよ」。

「そりや、『蓬屋』と書くよりも『四方木屋』と書いた方がおもしろいでせう。いかにも山家らしくて」。

こんな話も旅らしかつた。

かるさん
裁附の類



中央線の落合川驛まで出迎へた太郎は、村の人達と一緒に、この私達を待つてゐた。木曾路に殘つた冬も三留野あたりまでで、それから西は既に花のさかりであつた。水力電氣の工事で堰きとめられた木曾川の水が、大きな溪の間に見えるやうなところで、私はかるさん姿の太郎と一緒になることが出來た。そこまで行くと、次郎達の留守居する東京の方の空も遠かつた。「漸く來た」と、

私はそれを太郎にも末子にも言つて見せた。

年とつた兄嫁だけは山駕籠、そのほかのものは皆徒歩で、それから一里ばかりある靜な山路を登つた。路傍に咲く山つゝじでも、菫でも、都育ちの末子を樂ませた。登れば登るほど清く澄んだ山の空氣が、私達の身に感じられて來た。舊い街道の跡が一筋眼につく所まで進んで行くと、そこはもう私の鄕里の入口だ。途中で私は、森さんといふ人の出迎に來てくれるのに逢つた。森さんは太郎より年長な友達で、太郎が四年の農事見習から新築の工事まで、殆ど一切の世話をしてくれた人である。

鄕里に歸るものの習で、私は村の人達や子供達の物見高

い眼を避けたかつた。今だに古い驛路の名殘を見せてゐるやうな坂の上の方からは、片側に續く家々の前に添うて、細い水の流が走つて來てゐる。勝手を知つた私は、ある拔け道を取つて、丁度その村の裏側へ出た。太郎は私の直ぐ後から、すこし後れて姪や末子もついて來た。私は太郎の耕しに行く畠が、どつちの方角に當るかを尋ねることすら樂みに思ひながら歩いた。私の行先にあるものは、幼い日の記憶を喚起すやうなものばかりだ。暗い竹藪のかげの細道について、左手に小高い石垣の下へ出ると、新しい二階建の家のがつしりとした側面が私の目に映つた。新しい壁も光つて見えた。思はず私は

自作農
自分の畑を持つて居る畑を作る

太郎を顧みて、

「太郎さん、お前の家かい。」

「これが僕の家さ。」

やがて私はその石垣を曲つて、太郎自身の筆で屋號を書いた、農家風の入口の押戸の前に行つて立つた。

「四方木屋。」

太郎には、自身に作れるだけの田と、畑と、薪材を取りに行くために要るだけの林と、それに家とを私はあてがつた。自作農として出發させたい考で、餘分なものは一切與へぬ方針をとつた。

都會の借家住居に慣れた眼で、この太郎の家を見ると、新規に造つた爐邊からしてめづらしく、表から裏口へ通り抜けられる農家風の土間もめづらしかつた。奥もかなり廣くて、青山の親戚を泊めるには十分であつたが、大人から子供までいれて五人もの客が、一時にそこへ着いた時は、いかにもまだ新世帶らしい思をさせた。

「きのふまで左官屋さんが入つてゐた。庭などはまだちつとも手がつけてない。」

と、太郎は私に言つて見せた。

何もかも新規だ。まだ柱時計一つ掛つてゐない爐邊には、太郎の家で雇つてゐるお霜婆さんの外に、近くに住むお菊婆さんも手傳に來てくれ、森さんのお母さんまで來

て、わが兒の世話でもするやうに働いてゐてくれた。

私は太郎と二人で、部屋々々を見て廻るやうな時を見つけようとした。それが容易に見當らなかつた。

「この家は氣に入つた。思つたよりよい家だ。よつぽど森さんにお禮を言つてもいゝね」

わづかにこんな話をしたかと思ふと、また太郎はいそがしさうに私の側から離れて行つた。そこいらには、まだ乾き切らない壁によせて、私達の荷物が取散らしてある。末子は姪の子供をつれながら、部屋々々をあちこちとめづらしさうに歩きまはつてゐる。兄嫁も三十年振での歸省とあつて、昔馴染の人達が出たり入つたりするだけ

でも、かなりごたゞ〳〵した。

人を避けて、私は眺望の好い二階へ上つて見た。石を載せた板屋根、ところ〴〵に咲亂れた花の梢、その向ふには春深く霞んだ美濃の平野が遠く見渡される。天氣の好い日には、近江の伊吹山までがかすかに見えるといふことを、私は幼年の頃に自分の父からよく聞かされたものだが、曾てその父の舊い家から望んだ山々を、今は自分の子の新しい家から望んだ。

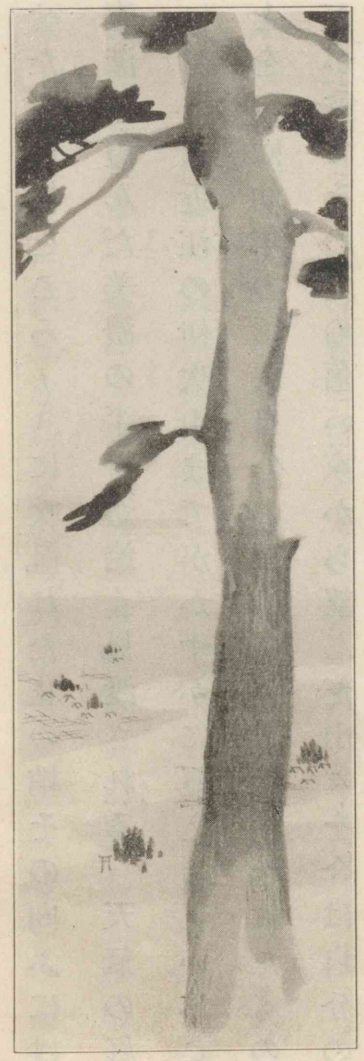
私はその二階へ上つて來た森さんとも一緒に、しばらく窓の側に立つて、久しぶりで自分を迎へてくれるやうな惠那山にも眺め入つた。「あそこに深い谷がある。あそ

島崎藤村
名は春樹
詩人
小說家

こに遠い高原がある。とその窓から指して言ふことが出來た。

（島崎藤村―嵐）

五　山の中で



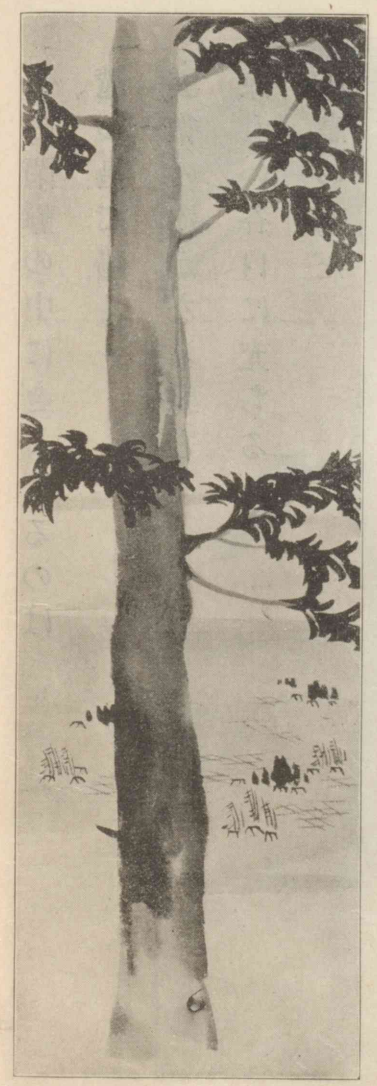
山の中の靜かさ
登つて來る人も無い

この閑靜の中にきこえるのは
麓の畠で鳴く
雲雀の遙かなる聲と
涼しい谷口に充ちる
小鳥の囀だ

松や　檜や　杉が　しん〳〵と聳え
その梢を越して
青い平野と天空が開けてゐる
桑の綠と　麥の黃色が
つや〳〵しく日に輝いて
寶石をぶちまけたやうに

千家元麿
詩人

眩しく輝いてゐる
小さい人家も　藪も　青田も
杜も流も　すべてが愛らしく整然として
どこまでも　限りなく續いてゐる
遙に　地平線は壯大な青い線を描き
海のやうに充實して盛上つてゐる　（千家元麿―炎天）



六　廢園の薔薇　その一

さてこの廢園の隅に幾株かの薔薇があつた。それは井戸端の水はけに沿うて、垣根のやうに植ゑつけられて居るのであつた。若し十分に繁茂して居れば、二三間つゞきの立派な花の垣根を造つたであらう。けれどもそれらは、甚しく不幸なものであつた。朝日をさへぎつては杉の木立があつた。夕日は、家の大きな影が、それらの上にのしかゝつて邪魔をした。さうして正午の前後には、柿の樹や梅の枝が、この薔薇の樹から日の光を

奪つた。それら杉や梅や柿の茂るがまゝの枝は、薔薇の上へのさばつて屋根のやうになつてゐた。かうしてこれらの薔薇の樹は、その莖はいた〳〵しくも蔓草のやうに細つて、尺にもあまるほどの雜草の中でよろ〳〵と立上つてゐた。

八月半ばすぎといふのに、花は愚か、それらの上には一片の――實に文字どほりに一片の青い葉さへもないのであつた。それらの莖が、まだ生きたものであることを確めるためには、彼はそれの一本を折つて見るほどであつた。日の光と溫かさとは、すべての外のものに全く掠められて、土の中に蓄へられた彼等の滋養分も、彼等の根元

ゲーテ
ドイツの詩人
（一七四九―一八三二）

にはびこつた名もない雜草に悉く奪はれた。彼等は自然から何の恩惠も享けては居ないやうに見えた。たゞこんな場所を最も好む蜘蛛の巢の、ちやうどいゝ足場のやうになつて、たゞそれのためばかりに有用なものになつた。薔薇はかうしてまで生存をまだつゞけて居なければならなかつた。

薔薇は彼の深く愛したものの一つであつた。さうして時には、「自分の花」とまで呼んだ。何故かといふに、この花に就いては一つの忘れがたい慰めに滿ちた詩句をゲーテが彼に遺して置いてくれたからである。――「薔薇ならば花開かん」と。又、たゞそんな理窟ばつた因緣ばかり

ではなく、彼は心からこの花を愛するやうに思つた。その豐饒な杯から溢れ出すほどの過剩な美は、殊にその紅色の花にあつて彼の心をひきつけた。その目くるめくばかりの重い香は、彼には甘美な氣分を思はせるものであつた。さうして彼がさう感ずるが如く、古來幾多の詩人が幾多の美しい詩をこの花に寄せて居るのであつた。西歐の文學は、古來この花のために王冠を編んで贈つた、支那の詩人も亦あの繪模樣のやうな文字を以て、その花の光輝を歌ふことを見逃さなかつた、一度詩の國に足を踏入れるものは、誰しも到る處で薔薇の噂を聞くほど。さうして薔薇の色と香と、さては葉も刺も、それらの優秀な無數の詩句の一つ一つを肥料として、己の中に汲上げ吸込んで、その爲に枝もたわゝになるかと思へるほどである。それがその花から一しほの美を彼に感得させるのであつた。それらの事が、やがて無意識の中に、彼をして薔薇を愛させるやうにしたのであらう。自然そのものから、眞に清新な美と喜とを直接に摘みとることを知らなかつた頃から、それらの藝術を通して、彼はこの花にのみは、かうした深い愛を捧げて來て居た。馬鹿々々しい事であるが、彼は「薔薇」といふ文字そのものにさへ愛を感じた。

七　廢園の薔薇　その二

○

それにしても、今、彼の目の前にあるところの花の木の見すぼらしさよ。彼は、曾て、非常に暖い日向にあつた爲に、寒中に莟んだところの薔薇を故郷の家の庭で見た事もあつた。それは淡紅色な大輪の花であつたが、太陽の不自然な暖さに誘はれて、莟にはなつて見たけれども、

朝夕の日かげのない時には、南國だとしても寒すぎたに違ひない。莟は日を經ても徒に固く閉ぢて、それのみか、白い中にほの紅い花片の最も外側のものは、不思議なことには、日々に綠色の細い線が出來て來て、葉に近い性質、――言はば花片と葉との中間のものとでもいふやうに硬ばつて行くのを見たことがあつた。けれども彼が今目の前に見るこれらの薔薇の樹は、その哀れな點では曾てのあの莟の比ではない。彼はこれらの樹を見てゐる中、衝動的に一つの考を持つた。どうかしてこの日かげの薔薇の樹、忍辱の薔薇の樹の上に日光の恩惠を浴びせてやりたい。花もつけさせたい。かう言ふのが彼のそ

の瞬間に起つた願であつた。しかしこの願のなかには、わざとらしい、遊戯的な、所謂詩的といふやうな、又そんな事をするのが彼自身にふさはしいといふ風な態度に滿ちた心が、その大部分を占めて居たのである。さて彼はこの花の木で自分を下うて見たいやうな氣持があつた。

「薔薇ならば、花開かん！」

彼は自分で近所の農家へ行つた。足早に出て行く主人の姿を、彼の二匹の犬は目ざとくも認めて追ひかけた。錆びた鋸と桑剪り鋏とをかたげた彼が、二匹の犬を從へて得意げに再び庭へ現れたのは、五分とはたゝないうちであつた。彼はにこ〳〵しながら薔薇の傍に立つた。

どうすれば其處を最もよく日が照すだらうと、見當をつけて上を見廻しながら、さて肩脱ぎになつた。まづ鋸で、最ものさばり出た柿の太い枝をひきはじめた。枝からはぼう〳〵と白い粉が降るやうにこぼれて、鋸の齒が半以上に喰入ると、まだ斷ちきれない部分は、脆くもそれ自身の重みを支へきれなくなつて、やがてぽきりと自分からへし折れ、大きな重い枝は、それの小枝を地面へ打附けて落ちかゝつた。するとその隙間からは、すぐ日の光が、投げつけるやうに、押寄せるやうに、浸り渡るやうに、あの枯木に等しい薔薇の枝に降りそゝいだ。薔薇を抱擁する日向は追々と廣くなつた。押しかぶさつた梅や杉や

柿の枝葉が、追々刈られたからである。彼は桑剪り鋏で、薔薇の枯枝を拂うた。其處にはいろ〳〵の蜘蛛が潜んで居た。蠅取り蜘蛛といふ小さな足の短い蜘蛛は、枝のつけ根に紙の袋のやうな巣を構へて居た。鼈甲のやうな色澤の長い足を持つた女郎蜘蛛は、大仕掛な巣を張渡して居た。鋏がその巣を荒すと、蜘蛛は曲藝師の巧さで絲を手繰りながら逃げて行つた。

正午すぎからの彼のこの遊びは、夕方になると、生垣の頭がくつきりと一直線に揃ひ、その壁のやうに平になつた側面には、折りからその面と平行してさしこむ夕日の光線が、榊の黑い硬い葉の上に反射して綺麗にきら〳〵と

光つた。

「やあ、これはさつぱりしましたね」。

と、こんな風の御世辭を言ひながら行く野良歸りの農夫もあつた。

○

圖らずも、ある朝――それは彼が手入れをしてから二十日足らずの後である。彼は偶然、薔薇の樹のある綠鮮かな新しい枝の上に花が咲いてゐるのを見出した。赤く、高く、たゞ一つ。「永い〳〵牢獄の中でのやうな一年の後に、今漸くまた五月が來たのであらうか！」その枯れかかつて居た樹の季節外れの花は、歡喜の深い吐息を吐出

しながら、さう言ひたげに今四邊を見まはして居るのであつた。秋近い日の光は、それに向つて集注して居た。おゝ薔薇の花、彼自身の花。「薔薇ならば、花開かん」。彼は再びその手入れをした日の心持が激しく思ひ出された。彼は高く手を延べてその枝を捉へた。そこには嬰兒の爪ほどの色あざやかな石竹色の軟かい刺があつて、枝を捉へた彼の手を輕く刺した。それは甘へる愛猫が彼の指を優しく嚙む時ほどの痒さを彼に感じさせた。彼は枝をためて、それを己の身近く引寄せた。その唯一つの花は、あゝ、ちやうどアネモネの花ほど大きかつた。さうしてそれの八重の花びらは、山櫻のそれよりももつと小さかつた。それは庭前の花といふよりも、寧ろ路傍の花の如くであつた。しかもその小さな哀れな花が、唇より赤く、そしてやはり薔薇特有の可憐な風情と氣品とを備へ、鼻を近づけると香さへ帶びて居るのを知つた時、彼は言知れぬ感に打たれた。悲みにも似、喜びにも似て、何れとも分ちがたい感情が、切りなく彼にこみ上げて來たのである。彼は一種不可思議な感激に身ぶるひさへ出て、思はず目をしばたゝくと、目の前の赤い小さな薔薇は急にぼやけて、雙の眼がしらには涙がわれ知らず滲みでて居た。

（佐藤春夫―田園の憂鬱）

佐藤春夫
詩人
小說家

八　フランスの旅

パリを二日見物して廻つた其の日の夕暮、いよ〳〵リヨン市へ出發するため、自分は直ぐ宿へ立戻つて一切の勘定をすましたが、肥つたおかみさんは、命じた馬車の來るまでと、其の帳場の長椅子に自分を招いたので、そのまゝしばし腰を下ろした。　おかみさんは深切に、汽車の事、停車場の事、切符の買方から、フランスには贋金が多いから、用心しろといふやうな事まで、いろ〳〵注意してくれた後、いざ馬車が來て出發といふ間際に、ほんのその場の思付であつたらうが、ストーヴの上の花瓶から白ばらの一輪を拔取つて、道中のお慰みにと自分に手渡してくれた。

ガール、ド、リヨン　パリの一停車場

マルセイユ　地中海岸のフランスの港

牡丹のやうな大きなフランスの白ばらである。

ガール、ド、リヨンの停車場から、マルセイユ急行の列車に乗る。　自分は窓際に席を占め、列車が次第にパリの町端れを離れて、廣い〳〵麥の野中を過行く夕陽の景色を眺めた。　紅の夕映が黃金色なす麥の畠に反映する中に、青い夏木立が、紺色になつて彼方此方に立つてゐる。　家路を急ぐ男や女や又は家畜の影は、黃昏の光の薄れゆくに從つて、却つて明かに、遠い地平線のはづれに動く――。

あゝ此の明るい靜なフランスの野の夕暮、この幽暗・朦朧たる黃昏、平安限りなき微光の中に萬象は模糊として却つて其の輪廓を鮮かにする黃昏、天地は漠然として、唯、色

と影と音ばかりなるこの黄昏は、如何なる醜きものも――醜きもの直に美しきものと見ゆる夢幻、神祕、不可思議の瞬間である。

一點、ルビーのやうな赤い宵の明星が輝き出した。路傍の人家には灯がつき、それが野川の水に映つてゐる處もある。自分は、一刻々々蒼い〳〵夜の色が際限のない麥の野の上に擴がつて行くのを打ちまもつてゐたが、パリを出てからは

フランスの田舍

カンサス州　合衆國中部、ミシシッピ河右岸の地方
ミゾリ州　カンサス州の東の地方
イリノイズ州　ミゾリ州の東、ミシシッピ河左岸の地方

もう都會らしい町は一つもない。小さい村の停車場を幾箇所も、急行列車は風の如くに飛び過ぎるばかりで、平かな麥の野、繁つた木立、悠然たる小川の流のみ、限りもなく引續く。と云ふものの、其の趣はかの單調漠然たる北米大陸中部の平野とは全く異つてゐる。カンサス州の牧野、ミゾリ州・イリノイズ州の玉蜀黍畑の景色には、何處かに言難い荒涼無人の氣味があつて、同じ平和の野とは云ひながら、旅の心に一種の悲哀を與へる――強い、大きい、云はば男性的の悲哀を與へる。が、それに反して今見るフランスの野は、何も彼も皆女性的で、夜の中に立つ森の沈默は淋しからぬ暖い平和を示し、野や水の靜けさは

柔い慰撫に滿ちてゐるらしく思はれた。アメリカの自然を以て嚴格なる父親の愛にたとへるならば、フランスの自然は母親の情けに等しい心地がする。

このなまめかしく優しい景色は、折から昇る半月の光に、一層の美しさを添へはじめた。あゝ故郷を去つて以來四年の旅路に、自分は今までこんな美しい景色に接した事はない。

窓を明けると、野一面の枯草の匂が人を醉はせる中に、自分は大西洋を越えて來た長い旅路の疲で、思はず知らずうと〳〵眠るかと思へばまた覺める。覺めるかと思へばまた眠る。覺めるたびに眺める窓の外には、冴えて行く月光、更け行く夜の空、自分は何れが夢、何れがまことの景色やら、もう判斷する事が出來なくなつた。

デジョン　アルガンディー地方にあつて、パリとリヨンのほゞ中間の都會

たしか十二時過ぎてからの事であつたらう。汽車がとある停車場にとまつて、驛夫が「デジョン、デジョン」と呼ぶ。窓の下では女連れの三四人が、「スキスの湖水に行くにはどの汽車に乘換へればよいのか」と、高聲に聞いてゐた。その聲が寢覺の耳に譯もなく不思議に聞え、あゝ、この明るい月の夜更けにフランスを越してスキスの湖水へ行くとは、何處の若い女であらう。月の世界からでも來た人ではないかしら——と、その白い夏着の姿が妙に神々しく見えた。女連れは向ふへと歩いて行く。汽車は五

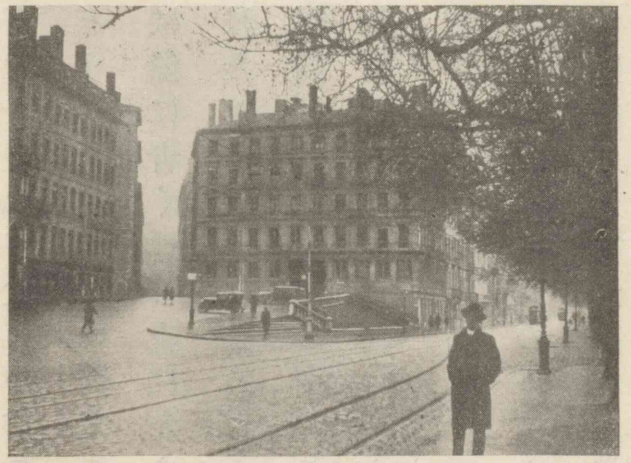
分もたゝぬ中に、また走りはじめる。

自分はいよ〳〵疲れて、びろうど張りの腰掛も今は痛くて堪へられない。　瞼は重くなつて、おのづと閉ぢる。それでも自分はこの得がたい月夜が惜しさに、眠り〳〵眼をみはると、一帶の地勢はよほど變つて來たらしい。見渡すかぎり殆ど高低のない平地で、繁つた木立は次第に稀になり、人家は絶え、汽車の線路と並行に走る一條の廣い道のほとりには、フランス特有の高いポプラの並木ばかりが、一列一樣の高さに何百本何千本とも數知れず打續く。――と見る中に、四面忽ち眞白な幕を引いたやうな狹霧に蔽はれ、その切れ目〳〵に砂地らしい白い浮洲

が見える。土地一帶は驚くほど低く平であるらしい。何でもよほど大きな河のほとりと想像される。自分はどうかして流れる河水を見定めたいと思つたが、月の光は餘に靑く、地の上にたなびく霧の餘に白くて、疲れた眼はたゞ夢にさまようばかり。車中に地圖がかけてあるが、椅子から立上つて見るのが如何にもおつくうなので、今見よう〳〵と氣はあせりながら、つい知らぬ間に到頭眠つてしまつた。

突然列車が一條の鐵橋を渡る響に目を覺して見ると、白い壁塗の人家が高い石堤の兩岸に立續き、電燈の光か月の光か、あたりは非常に明るくなつてゐる。

いよ〳〵リヨンの市街に入つたのである。自分はあわてて落ちてゐる帽子をかぶり、衣服の塵を拂つて汽車を下りた。停車場の時計は夜の三時半。夏の空は星消え月落ちて、もう白々と明けかゝるのであつた。



リヨンの朝

辻馬車に乘つて寢靜まつた街を過ぎ、河岸のとあるホテルの一室に入つたが、自分は寢る前にしばしこの明けやすいヨーロッパの曉の空を見ようと、露臺の窓を明けると、遠く近く小鳥の囀る聲――都會の夜明に鳥の歌ふ聲を聞くとは、ニューヨークから來たものの耳には實に何たる不思議であらう。

ニューヨーク　北米合衆國のハドソン河口にある、米國最大の都會

目が覺めた時、思ひ出したのは、パリの宿のおかみさんがくれた白ばらのことであつた。汽車の窓の上に置いたまゝ、自分はあわてて下車したため、すつかり取忘れてしまつたのだ。花は依然として香ばしく、今頃はマルセイユに行つてしまつたらう。或はその途中、出入の人の足に踏みにじられてしまつたかも知れぬ。

（永井荷風―荷風集）

永井荷風　名は壯吉　文學者

松江城　出雲國松江市の北郊末次村にあつた、松平氏の居城

小泉八雲先生　ラフカディオ、ハーンアイルランド生れの英人文學者明治三十七年段、年五十五

九　小泉先生の舊居

松江城址の美しい青葉を照す午後の日ざしが傾く頃、靜な濠端の或家の門に私の車は止つた。それは如何にもさむらひの敗殘凋落の跡を想はせる家中屋敷の一つであつた。古びた門構と云ひ正面の玄關と云ひ、封建時代その儘の物であつた。これぞ小泉八雲先生の舊居である。

正面の玄關の左手に四疊があつて、それは南の方の小さい庭に面してゐる。苔むした石燈籠や庭石も、かつては先生が飽かず眺められたものであつた。殊に緣側に近い處にある百日紅だの、珍しい老木の木蓮だのは、先生の殊の外なる愛樹であつたと聞くさへ懷しい。樹木の精の神話を語つた古代のギリシャ人のやうに、先生もまた草木に宿る生命に強い愛惜の念を持たれた。後年東京に移られてからも、或る寺院の老木を一握の黃金に代へて惜しげも無く伐倒さうとした俗僧を見て、ひどく怒られたと云ふ話がある。先生はその深い愛の生活、強大な感情生活の中に、自然と人生と超自然のすべてを抱擁して居られた人であつた。

小泉先生の舊居

その次の間の十疊は、先生が新婚の樂しい日を送られた茶の間であつた。座蒲團に坐つて、日本の煙管で日本の刻煙草を吸ひながら、奥さんや來客と打解けて語られたのは此の室であつた。この家の持主であり現在の主人である根岸さんは、私を此の部屋に通して色々の話をせられた。

小泉八雲

日本における先生の、舊居の地としては、この松江のほかに、熊本時代のもあれば、東京の大久保の邸もある。しかしこの出雲の地は、日本に歸化せられた先生に取つては特殊の意味がある。天外萬里漂浪の孤客として、その頃はまだよく內情を世界に知られなかつた遠い〳〵日本の、しかもまた山陰の片ほとり、夢と影との神話の都に來て、そこで舊藩士の女小泉氏を娶られた。英米の社會からは全く韜晦し去つて、突如として此の地から、あの最大の名著「日本瞥見錄」二卷を公にせられたのであつた。作者は果して何處にある如何なる人ぞと、海のかなたの文壇の驚異となり、はてはラフカディオ、ハーンその人の實

在をすらも疑はれた時があつた。

先生と同じく近世散文の巨頭であるロバート、ルイス、スティヴンスンも故國スコットランドを出てからは、足跡天下にあまねく、米國で結婚してのち、太平洋をさまよひ、はてはサモアの島に數奇の生涯を終つたので、後の研究者はその足跡を辿るのに沒頭してゐる。私は松江に於ける先生のこの舊居の地が、南洋のサモアに於けるスティヴンスン終焉の地の如くに、今後は益〻多くの文學巡禮者の驚歎と好奇の念をひく事であらうと思ふ。先生自らに於ても、その樂しいゆかしい思出と愛惜とが、特に松江の此の家から離れなかつたものと見えて、後年熊本から東京帝國大學に轉任せられる途中――まだ全く山陰地方に汽車の便の無いころ――わざ〳〵廻り路をして此の第二の故郷を訪はれ、「我が家に歸つた」といつて喜ばれたさうである。

この茶の間に接した北向の六疊の一室が、先生の書齋であつたといふ。すべてが閑寂な、古びた、いかにも士族ら

ロバート、ルイス、スティヴンスン（一八五〇―一八九四）

サモア　南太平洋にある群島

しい空氣に滿ちた部屋である。障子を開けて緣側に出ると、そこの庭には小さな池があつて、まんなかに一本の松を植ゑた小島がある。裏手の方は以前しばらく模樣がへしてあつたのを、近頃根岸さんがまた先生在住の頃の舊態に復せられたのださうだ。庭の左の方にある土藏を指しながら、根岸さんは色々の話をされた。

「この池の中には隨分澤山蛙がゐたさうですが、それを捕らうとて、藏の後の方から蛇だの鰍（イタチ）だの出て來たもんださうです。時々蛙が捕られると、あはれな悲鳴をあげるので、その時は先生の一家が皆飛出して來て大騷をしたと奧さんが話されました。それで先生は時

山中鹿之助　戰國時代周防、尼子氏の臣、主家の爲毛利氏に敵し、天正六年に殺された、年三十四

時食べのこりの肉を皿に入れて石段に置き、蛇や鰍に與へられました。私が馳走してやるから蛙を捕るだけはよしてくれよと、先生はいつもいはれたさうです」。

さう云ふ事を根岸さんは話された。裏の籬を越えて右手に見えるのが赤山の杜で、それから聞える鳩や杜鵑の聲に耳を澄ましながら、先生はこの書齋に引籠つて、瞑想もし、讀書もし、創作もせられたのであつた。また正面はるかむかふの方に、樹間を洩れて見える山が山中鹿之助の城址ださうである。

ゆつくり話を聞いてゐる間に、日は暮れさうになつた。再び部屋に歸つて座に就くと、もう人の顏がぼんやりす

る程にほの暗かつた。私はこの夢の國に來て夢の家を
たづね得た事を喜びながら、暫くして辭し去つた。門前
のお濠の水は深く濁つて、青葉のゆふべの影をやどして
みた。

（厨川白村）

厨川白村
名は辰夫、文學博士、京都帝國大學教授、大正十二年歿、年四十四

一〇　信濃路の旅　その一

上野より汽車にて横川に行き、馬車にて碓氷峠を越ゆ。
鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絶壁、百尺の老
樹聳え聳えて天も高からず。樵夫の唄、足もとに起つて、
見おろせば蔦かづらを傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さ
つと吹きとよめきて、萬山自ら震動す。遙に來し方を見

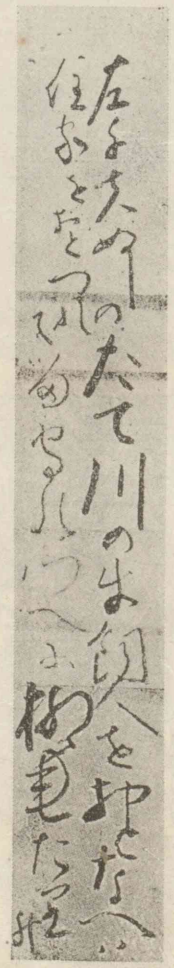
横川
群馬縣碓氷郡白井町にあるもの、上野から驛八十一哩半

碓氷峠
信濃と上野との境にある峻嶺、二十六個の嶺トンネルを以て汽車が通じてゐる

かへるに、山又山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆
人といへるはかれかとばかり疑はれて、

つゞら折幾重の峰をわたりきて
雲間にひくき山もとの里

筆蹟
千夫左住家なおしの
とづれて
川の牛飼
人をおとなへ
留守の門べ
ばに柳垂たり
升



子規筆蹟

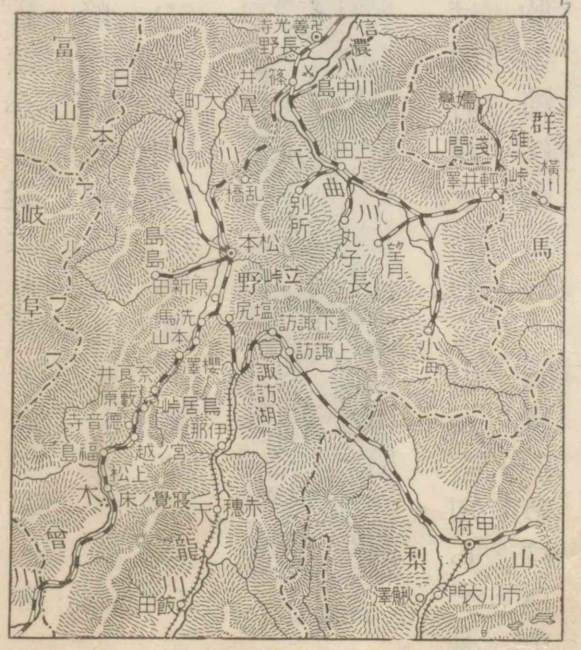
日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海
とも知らず、かけ上る駒の蹄に、蹈散らす雲霧のあはひを
見れば、一歩の外は削りたてたる嶮崖の底もかすかにて、
いとおそろし。登れども登れども窮る處を知らず。山

輕井澤　長野縣北佐久郡東長倉村にある地、避暑地として別莊が多い

ますゝ高く、雲いよゝ低し。

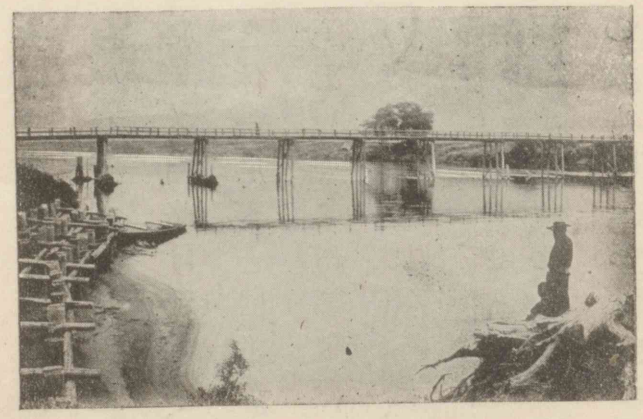
見あぐれば信濃につゞく若葉かな

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり。例ならず疾く起きいでて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を繞らして、草のみ生茂りたれば、其の色染めたらんよりも麗し。



善光寺　長野市にある三國傳來の阿彌陀如來なまつる

川中島　犀川と千曲川とに挾まれた土地、上杉謙信と武田信玄との古戰場



川中島

山々は萌黄淺黄やほとゝぎす

淺間は雲に隱れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて、善光寺に詣で、また川中島を過ぎて篠井までたち戻る。古戰場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川の廻るあたりにやあらん、河の水はいたく瘦せて、ほとりの麥畠空しく赤らみたり。

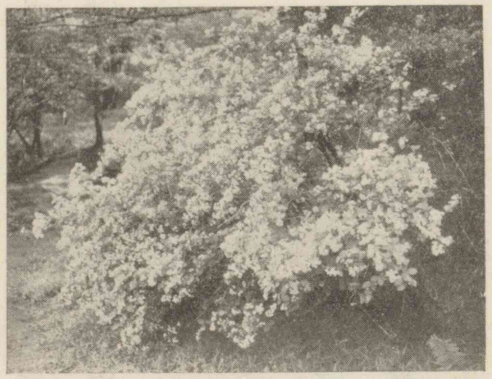
日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣

衾かたしきいづくにか寢む

次の日雨降る。路に立てる芭蕉塚に興を催して辿り行けば、行くて遙に山重なれり。野の狹う尖りて、次第々々に入る山路けはしく、弱足にのぼる馬場峠、さても苦しやと休む足もとに、誰が栽ゑしか珊瑚なす覆盆子、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し上りて、とある樹蔭の葭簀茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹のかげ一河のながれとや、ひじりの教も時にあうてこそ有りがたけれ。

此の夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の

雜談に夢覺されて、つとめてこゝをたち出づれば、はや爪先あがりの立峠、旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとの勸め、ありがたや、乘りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠は、なにとて苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、「これなん卯つ木と申す」といふ。いとうれしくて、



卯の花

むら消えし山の白雪來て見れば

駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田まで三里の道を馬車にちゞめて、洗馬まで たどりつき、饅頭にすき腹をこやして、本山の玉木屋に宿る。

本山　長野縣東筑摩郡、洗馬の南一里弱

一一　信濃路の旅　その二

本山を出で櫻澤を過ぐれば、こゝぞ木曾の山入。「山のけしき水の有樣はや尋常ならぬ粧にうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳に立ちて珍し。

櫻澤　本山から二里

桃源　支那湖南省にある仙境

奈良井の茶屋に息ひて「茱萸はなきか。」と問へば「茱萸といふものは知り侍らず。珊瑚實ならば、背戸にあり。」といふ。山中に珊瑚、さてもいぶかしと裏に廻れば、やはり茱萸なり。主人の女房、深切に採りてくれたり。峽中第一の難處といふ鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、瘦馬の力に面白う攀上る。

奈良井　木曾谷の北口をなす村

馬の背や風吹きこぼす椎の花

頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして樵夫の小徑微に隱見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家にたち寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雲をあやどる山脈は、いよい

鳥居峠　奈良井から廿町、藪原へ二十五町、御嶽神社の鳥居を頂上に立てその遙拜所とする

藪原　西筑摩郡

ぞやかなん

宮越　藪原の南二里

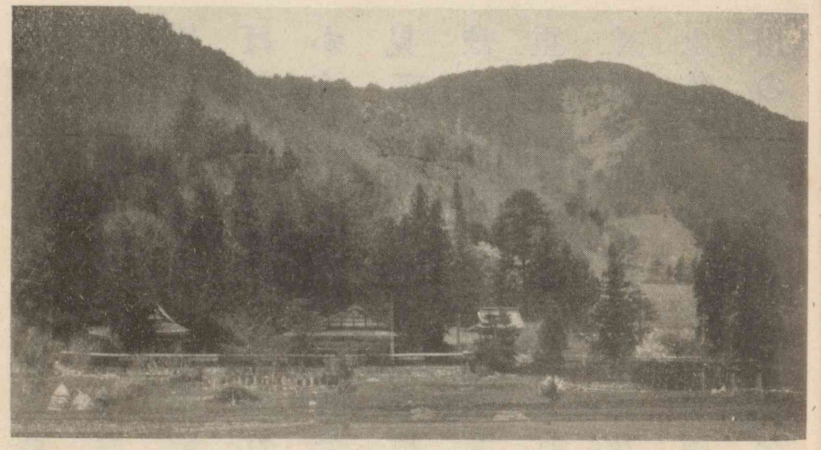
徳音寺　壽永年間の建立、義仲の位牌をまつる

旭將軍　木曾義仲

よせまりて、被せかゝらん勢怖ろしく、奥山の雪を解かして清らかなる水は、谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のただ中に、大なる岩の一つ突きいでたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。宮越（ミヤノコシ）の村はづれに彳みて待つこと半時、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、畫の中よりぞあらはれ出でたる。笠をぬぎて慇懃に徳音寺の道を問ふ。翁のいふ、「さても優しの若者や。旭將軍のなき跡を弔はんとてや、こゝまでは來給へる。こゝに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の城の跡なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名殘なるものを、今

木曾宣公　義仲の法名は徳音寺院殿義山宣公大居士

福島　宮越から二里木曾谷中第一の町



徳音寺

は桑の木ばかりぞ秀でたる」と、一つ一つに指さす。そゞろに古を偲ぶ言葉のはし、この翁、謠ならば、かき消すやうにうせぬべし。日照山徳音寺に行きて、木曾宣公の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵・巴が淵と名づくとかや。福島をこよひの旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

翌日、朝大雨。待てども晴間な

し。傘を購ひ來りて、書流す句に、

折からの木曾のたびぢを五月雨

旅亭を出づれば、雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、又降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧（カケハシ）に着きたり。見る目危き兩岸の岩は、數十丈の高さに削りなしたるさま、一隻の屏風を押立てたるが如し。神代の昔より蒸し重なりたる苔の、美しう青み渡れるあはひ〳〵に、何げなく咲きいでたる杜鵑花（ツツジ）の麗しさ、狩野派の畫にやあらん、土佐畫にやあらん。下を覗けば、五月雨に水嵩增したる川の勢、渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎

棧　福島と上松との間にある

くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰打ちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮ぶかと疑はれ、足の裏ひや〳〵と覺えて強くもえ踏まず。通り來りし方を見渡せば、こゝぞ棧のあととおぼしきも、今は石を積み固めたれば、固より往來の煩もなく、只蔦かづらの力がましく這ひまつはれるばかりぞ古の面影なるべき。

むかしたれ雲の往來の跡つけて
　わたしそめけん木曾のかけはし

上松（アゲマツ）を過ぐれば、程もなく寢覺の里なり。寺に到りて案

蕉翁　元祿の俳人松尾芭蕉のこと。芭蕉は旅行を好み諸國に俳念の句を殘してある。この句は「かけはしや命からむつたかづら」

上松　福島から二里半

寢覺の里　上松から半里

内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指ざして、「こゝは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。」川のたゞ中の松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押したてたる岩を屛風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、こしかけ岩・俎岩・釜岩・硯岩・烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠や、こゝは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん。岩石は峨々として高く低く水に臨み、凹めるところは渦をなし、逼れるところは瀧をなす。い

正岡子規
名は常規
俳人
明治三十五年
歿、年三十六

島田
駿河國志太郡
大井川の左岸

金谷
遠江國榛原郡
大井川の右岸

かさま仙人の住處とも申

（正岡子規―獺祭書屋俳話）

一二　大井川

島田が原、今は新田になりて、大井川の水をせき入れて耕作をつとむ。右の方一町ばかりに島田が淵あり。島田より金谷へ一里。

男申しけるは、「いざや、こゝにとまり侍らん。」樂阿彌申すやう、「旅なれぬといふは此の事なるべし。この先に大井川あり。駿河と遠江との境なり。又あの世・此の世の境とも見るほどの大河なり。南風には水まさり、北西の風

内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指ざして、「こゝは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中の松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押したてたる岩を屛風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、こしかけ岩・俎岩・釜岩・硯岩・烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠や、こゝは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん。岩石は峨々として高く低く水に臨み、凹めるところは渦をな

正岡子規
名は常規
俳人
明治三十五年
歿、年三十六

島田
駿河國志太郡
大井川の左岸

金谷
遠江國榛原郡
大井川の右岸

かさま仙人の住處とも覺えてたふとし。

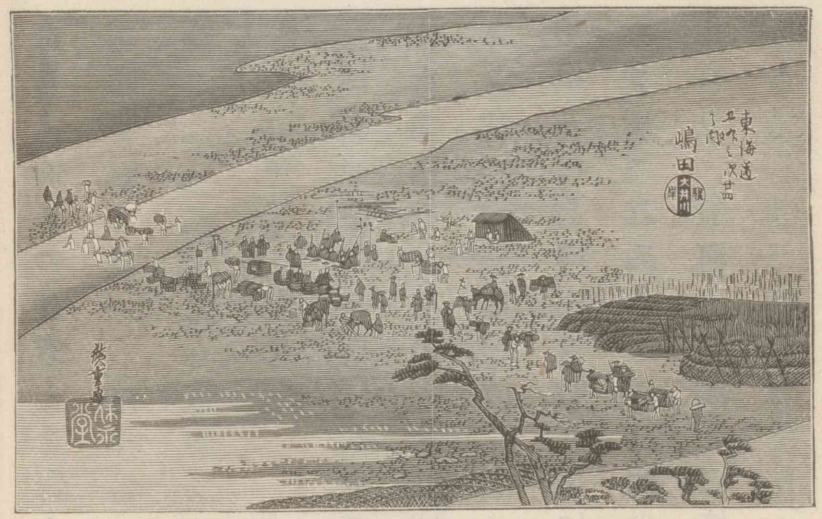
（正岡子規―獺祭書屋俳話）

一二　大井川

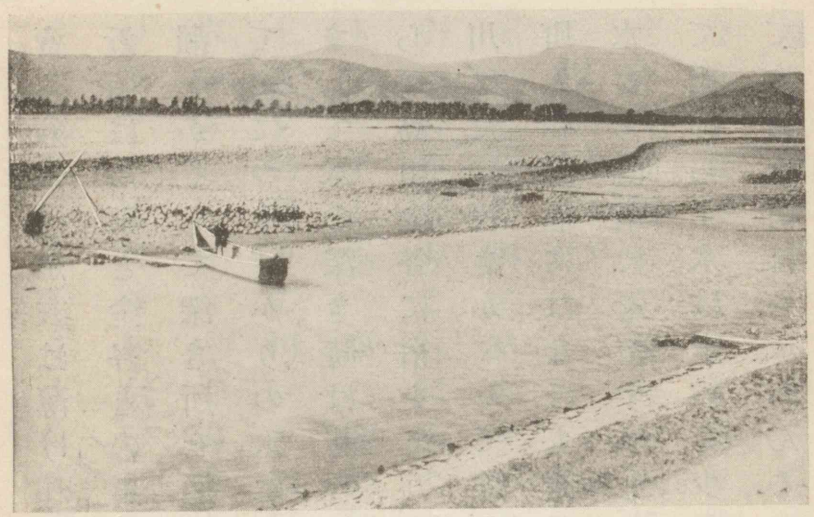
島田が原、今は新田になりて、大井川の水をせき入れて耕作をつとむ。右の方一町ばかりに島田が淵あり。島田より金谷へ一里。

男申しけるは、「いざや、こゝにとまり侍らん」。樂阿彌申すやう、「旅なれぬといふは此の事なるべし。この先に大井川あり。駿河と遠江との境なり。又あの世・此の世の境とも見るほどの大河なり。南風には水まさり、北西の風

飛鳥川
大和國高市郡にあるゝ世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬となる（古今集）



には水落つ。飛鳥川にあらねども、大雨降れば淵瀬かはる事度々にて定まらず。或は東の山の岸を流れて島田の驛を河中になす事もあり、或は西の方を流れて、金谷の山際にそふ事もあり、又は一帶の大河となりて、大木をながし大石をころばす事もあり、又はあまたに分れて、河原のおもて一里ばかりが間に、



幾筋も流るゝ時あり。古より舟も橋も渡すことかなはず。波高く、底には大石流れまろびて足を打たれ、水に溺れて死する者も多く、濡鼠の如くになりて、やう〳〵向ひの岸にあがるもあり。島田のものは川ごしのわざに出づ。我が家は水に漂ひ流るれども、旅人の財をむさぼる故に大水を喜ぶ。かの炭を

賣る翁が、己が衣は薄けれども、年の寒きを喜ぶが如し。

近頃は、島田と金谷との馬かた、川ごしを一味にして、淺き瀨をかくして深き所を通り、わざとふしまろびなんどして、腰につくばかりの水にも、二十疋三十疋の錢をとる。まして水の深き時は、其の賃限りなし。水のある時分ならば、島田・金谷に宿をとり、川越しの直段をきはむべし。川ばたに行きかゝりては、殊の外に賃高し。中にも出家・町人・伊勢詣には、なほも直段高くとるなり。今まこと大水ならば、宿に逗留すべし。然るにこの程は、日和打續きて雨降らず、水は定めて少なかるべし。今夜島田に泊りて、大河を前にかゝへんこと然るべからず、もし川上に

二十疋　二十五文で一疋

雨ふり、夜の間に水まさらばくやしからん。道は只一里なり。金谷にこえて泊り給へ。くたびれ給はば馬にめせ。とて、島田にて馬をかり、男をば打乘せ、樂阿彌は徒歩にて行く。

「さても此の川に鮎あり。水の淺き時は鵜繩を川上より引いてさがり、これにあたりてはねあがる鮎を、大狹網（オホサデ）をもつてすくふ。津の國の鼓が瀧にて鮎を汲むが如しなどうち物語りて、川ばたに行きて見れば、おもひのほかに水おほし。されども馬方心得たるものにて、瀨を尋ねてわたす。樂阿彌も、「がらじりの馬はあぶなきものぞ。わきを見れば眼のまふものぞ。眼をふさぎ、よく鞍つぼに

津の國の鼓が瀧　攝津國有馬郡にある、有馬温泉第一の勝景といはる、懸泉三十六尺

とりつき給へ。」と、男に力を添へて、「ほい〳〵。」というて渡るうちに、いつの間にか樂阿彌坊は行方しれずなりぬ。男は馬に渡され、馬子諸共に岸にあがりて、「これはそも御坊の流れ給ひけり。」とて、川下を見れば、一町ばかりの程に、何とは知らず黑きもの、浮きつ沈みつ、見えつ隱れつして、やう〳〵岸の上に這上りたるをみれば樂阿彌なり。「いかに。」と問へば、「さればこそ、水底を流るゝ石に躓き、ころりとまろびたれども、水心を知り侍れば、立泳ぎ臥泳ぎなどしてあがりぬ。」とて、ぬれかたびらしぼり、章魚からげに裾をからげて、金谷をさして行く。

（淺井了意―東海道名所記）

淺井了意　京都の人　著作家　寶永六年歿、年七十

佐殿　右兵衞佐源頼朝

彌太郎　堀彌太郎

御曹司　部屋住の公達の事、こゝは源義經

頭の殿　左馬頭源義朝

池の尼　平忠盛の後妻　平清盛の繼母　平頼盛の實母

伊東　名は祐親

北條　名は時政

伊豆の配所　田方郡蛭が島

一三　浮島が原の對面

佐殿は善惡に騷がぬ人にておはしけるが、今度はことの外嬉しげにて、「さらば、これへおはしまし候へ。見參せむ。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きによろこび、急ぎ參り給ふ。佐殿つく〳〵とこれを御覽じて、まづ涙にむせび給へば、御曹司もともに聲を呑みて泣き給ふ。

互に心のゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、「さても、頭の殿におくれ奉りて、その後御ゆくへを承り候はず。幼少におはし候時、見奉りしばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて、伊東・北條に守護せら

奥州　今の陸前・陸中・陸奥、秀衡は陸中磐井郡平泉に居た

れ、心に任せぬ身にて候ひしほどに、奥州へ御下向のよしは幽かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄弟ありと御忘れ候はで、とりあへず御上り候こと申しつくしがたく悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八箇國の人々を始として候へども、皆他人なれば、身の一大事を申しあはする人もなし。平家の討手のぼせばやと思へども、身は一人なり、賴朝自身すゝみ候へば、東國おぼつかなし、代官をのぼせんとすれば、心やすき兄弟もなし、他人をのぼせんとすれば、平家とひとつになりて、却つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひがたかりしに、今御邊を待ちつけて候へば、故左

八

八幡殿　源義家
刑部丞　源義光

馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思ひ候へ。吾等が先祖八幡殿の、後三年の合戰に、御弟刑部丞と一つになりて、遂に奥州を從へ給ひける時の御心も、賴朝が只今の心にいかでかまさるべき。今日より後は魚と水との如くにして、先祖の恥をすゝぎ、亡魂の憤を息めむ」と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。御曹司はとかくの返事もなくして、袂をぞしぼられける。これを見て、大名小名たがひの御心おしはかりて、みな袖をぞぬらしける。しばらくありて、御曹司申されけるは、「仰のごとく、幼少の時御目にかゝりて候ひけるやらむ。配所へ御下りの後は、義經も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ參りて、十六までかたの

九

秀衡　藤原氏、陸奥出羽の押領使基衡の子

義經記　作者不詳足利時代初期の作源義經の一代を脚色したもの

太宰府　九州二島を總管し外交警備を掌つた

如く學問を仕り、さて京都に候ひしが、内々平家方便をつくるよし承り候間、奥州に下向仕りて、秀衡をたのみ候ひつるが、御旗揚の由承りて、取りあへず馳せまゐる。今は君を見奉り候へば、故頭の殿の御見參に入り候心地してこそ候へ。身をば君にまゐらする上は、いかゞ仰に從ひまゐらせでは候べき」と申しもあへず、また涙をながし給ひけるこそあはれなれ。さてこそこの御曹司を大將軍にてのぼせ給ひけれ。

（義經記）

一四　平家と太宰府

「どうして平家は太宰府に落ちつけなかつたらうね」。

大貳　太宰大貳（太宰府の次官）

緒方　三郎維義、平資盛の家人、豐後守藤原頼輔の命を受けて平家を逐うた

原田大夫種直

Sが訊いた。

「やはり落人が嘗めなければならないみじめさだらうね」。

「でも、九州は平家の勢力範圍ではなかつたのかな。曾ては清盛が大貳であつたこともあるし、緒方や原田もその家人だし、源氏の東國に於けると同じではなかつたのかな」。

「それはさうだつたらうけれども、いかにもその落人になつて來た形がみじめだつたので、それと一緒に事をしようといふつもりになれなかつたんだらうかな。九州の武士達は、それは、東國の兵どもと比べたら、わる

くひらけてゐたらうから――。」

「さうかな。」

「かういふ柔弱な一族と事を共にしては、あとで碌なことはない。さういふ風に思つたのだね。それは君、無理はないよ。田舎にゐるものに取つては、中央があゝいふ風にどつちつかずになれば、どつちについて好いかわからなくなるからね。」

「頼みにして來た緒方が味方をしなかつたといふことが、太宰府を落ちなければならない大きな原因のやうに平家物語には書いてあるが。」

「それに、かういふことがあつたらしいね。九州の武士

平家物語　平家の盛衰を叙した物語、作者不詳、鎌倉時代の作

帝　安德天皇
法皇　後白河法皇
兵藤次　山鹿兵藤次秀遠

たちには、武士たちの内輪揉めといふやうなことが、例へば、緒方は原田が中心になつて帝に參ずるなら俺は法皇方になる、また兵藤次が世話するなら俺は知らないといふやうな、言はば平家にはあまり關係のないことが禍を成して、太宰府にはゐられなくなつたんだね。」

「田舎などにはよくあることだね。」

「だから厄介だね。緒方の世話にもなれない。原田の世話にもなれない。さうかと言つて、菊池も除外するわけには行かない、さういふ内輪揉めの中に挾まつたといふ形だね。」

「さうだね。」

「しかし、かうは言へるね。平家にすぐれた英雄がゐれば、さうした内輪揉めなんかにこだはつてゐずに、さうした異分子をいかやうにも統一して行くことが出來たのであらうけれども、さういふ人が平家にはゐなかつたんだね――」。

「確にさうだね。平家だつて、さういふ人が誰か一人ゐれば、太宰府を鎌倉のやうにする事は出來ない事はなかつたんだからね。立派な策源地にすることは出來たんだからな。現に、後に足利尊氏がそれをやつてゐるではないか」。

「さうだね」。

屋島　讃岐國香川郡にある、高松市の東北一里。壽永二年十月平家ばこゝに據つた

一の谷　攝津國武庫郡にある、壽永三年二月平家ばこゝに據つた

「あちこちに動いて行つた形がわるかつたんだよ。ずつと太宰府に落ちついてゐさへすれば、あんなに脆く滅びはしなかつたんだ。屋島――あそこまで出て行つたといふ形も、もうどうかと思ふのに、圖に乘つて一の谷あたりまで出て行つたりしたんだからね。あまり輕卒すぎたのだよ」。

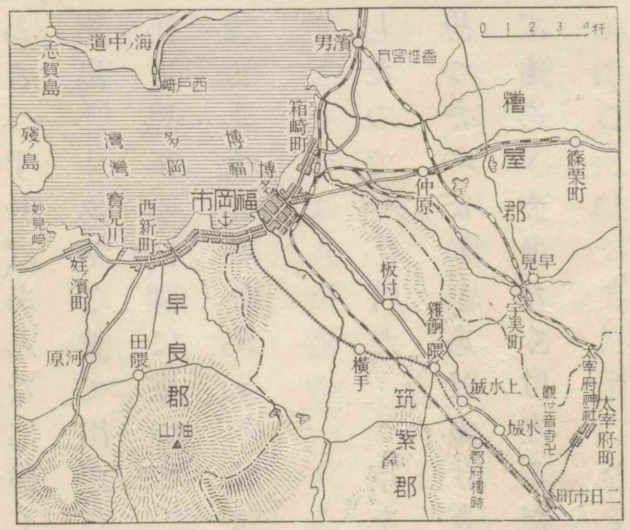
「でも、義仲の亂があつたりしたので、今が時だ――京を恢復するのは今だ――と思つたのだね。あせりすぎたにはすぎたけれども、誰でもあゝやりたくはなるだらうな」。

「まあ、それはさうだ」。

「それから思ふと、あの頼朝の忍耐はえらいよ。鎌倉にぢつと落ちついてゐた形はえらいよ。あゝいふ幕を打つ人物は、平家方には一人だつてゐなかつたんだから――それにしても、あの太宰府落はみじめだね。京を落ちた時よりも、もつとみじめだね――」。

私はその時のさまを頭に描いた。時は十月である。あの颱風のよくやつて來る頃である。車といふ車もなく、馬の數も少く、女房達もみな行縢（ムカバキ）をつけて草鞋を穿かなければならない。そのみじめな一行！　帝と女院との車のあとについて、あの街道の白い埃につゝまれてたどつて行かなければならない一行！　しかもそれが水城を出て、雜餉隈（ザッショクマ）を通つて、あの殘の島の海中に浮んでゐるのを前にして、博多港を護るためにその頃築かれてあつた石堤に沿つて、あの松の多い濱を箱崎へと往つてゐるのではないか。そしてその箱崎では、帝も女院もその前に額づいて、再び京に戻らしめたまへと心から祈念を凝らしてゐるではないか。ことにあの香椎の宮での情景

女院（安德天皇の御母建禮門院）



は、誰の心をも動かさずには置かなかつたであらう。神功皇后を祀つた社だけに、女院はことに心をこめられて、長い間、ぬかづきの頭を上げようとはせられなかつた。それにつけても平家物語に書いてあるそのあたりのさまが、歴々と思ひ出されて來るではないか。

折ふし下る雨、車軸の如し。吹く風、砂を揚ぐとかや。落つる涙、降る雨、わきていづれも見えざりけり。

香椎の宮

折ふし云々　平家物語卷八太宰府落の條の文

年たち返り養和元年（一八四）

一萬・箱王　工藤家次

祐家
祐繼
祐親
祐泰
祐成（一萬）
時致（箱王）
祐經

例の颱風が襲つて來たのである。海から吹卷いて來る風につれて、雨が斜にすさまじく吹きつけたのである。海は鳴り、波は湧き、松は叫ぶ濱邊を、濡鼠になつて一行は落ちて行つたのである。

（田山花袋―花袋行脚）

一五　空行く雁

新玉の年たち返り、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕ぐれ、箱王は母の膝の上にたはぶれながら、「いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛は、いづくにましますぞや。往きてをがみたてまつらばや。母御前いざさせ給へ。」といひければ、遙に忘れたるこしかた

母名は滿江、祐泰の死後、曾我に再嫁した

曾我殿太郎祐信

工藤一臈即ち祐經

鎌倉殿源頼朝

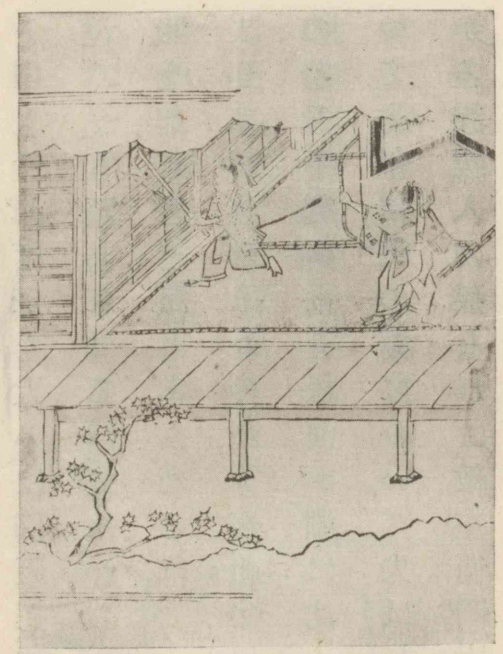
も、今さらおもひいだされて消えいるばかり思はれて、母、泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそおのれ等が父にてあれ」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。　箱王、かさねて申しけるは、「父御前は、まことやらむ『狩場より歸り給ふ道にて、工藤一臈とやらむに射られ死にたまひぬ。』と、兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきり者にて鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。　われらをも殺さむとや思ふらむ。　われらがこの里に在りと知らでや過ぐらむ」など、おとなしく語りければ、母よりはじめて女房たちまで、皆袖をぞ絞りける。

河津殿祐泰

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びゐたるに、五つ連れたる雁がねの南をさして飛びけるを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。　空を飛ぶつばさも、みな別の翼ぞまじへざりける。　五つ連れたる鳥の中に、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。　物いはぬ鳥類すらかくの如し。　われらは人倫にうまれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。　われらが父をば河津殿と申してありきとかや。　父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜り、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。　われわ

れより幼き者にても、馬・鞍・弓矢をもて、物を射ありくことの羨しさよ。これらの事ども思ひ續くれば、いつよりか今宵は父御前の戀しくおはしますぞや」とて、袖に顔をさし入れて、さめ〴〵と泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房これを聞きて、「あなあさまし。人もこそ聞け。いかに、和上萬達、夜も更けぬるに、さやうにておはするぞ。とく〳〵入らせ給へ」と怖ろしげにいひければ、二人のものは門外へ逃げいでて、思ふやうに飽くまで泣きて後に内に入りけり。

或時兄弟は、竹の小弓に薄刃の小矢を取添へて遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに、二人立向ひあなたこなたへ射通して、一萬、箱王に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿は十三、我は十五にだにもなるならば、如何ならむ野山にてもあれ、親の敵祐經を、かくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ。われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ」といひければ、弟も打ちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと



伊東入道祐親

千鶴御前 母は祐親の女

松河が淵 伊豆國田方郡伊東にある

人々思ひけり。

一萬が乳母此のよしを聞知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大いに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く〳〵語られけるは、「實か、おのれ等がさも怖ろしき謀叛を起さむと議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれ等が祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれ等かかる謀叛人の孫なれば、敵左衞門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時千度百度悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き

石橋山 相模國足柄下郡

石橋山の戰 治承四年八月（一八〇）

土肥の杉山 相模國足柄下郡土肥の山谷 石橋山の南

梶原景時 頼朝の寵臣

申してとゞまりたり。その故は、鎌倉殿石橋山の合戰に打負けて、土肥の杉山へ入らせたまひし時、梶原景時と曾我殿と、二人心をあはせて助け奉りし故に駿河國八郡の大名になされし、その御恩を皆返し參らせて、「二人の幼き者どもを助けて給はらむ」と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、「それ程の志ならば、二人の子供、祐信に預くるぞ。」と仰せられける故にこそ、汝等も安穩

にて、今まで希有の命を保ちたるぞ。それにつきても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。鳥類・畜類にても恩を知るとこそ聞け。況や汝等人倫において をや。然るを却つて曾我殿に歎を與へむこと、返す返すも口惜しかるべし。その恩を報ぜむと思はば、速に謀叛をとゞむべし。」と口説きたてて誡められければ、二人の子供、目と目とを見あはせ、顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬところにては內々談議しけれども、人目に顯はれては語り合ふこともなし。母も內々怖ろしき者どもの心樣かなと思はれければ弟の箱王を ば出家にせむとぞ思はれける。

（曾我物語）

曾我物語
曾我兄弟敵討の次第を叙したもの、著者不詳、著作の年代も不明であるが、時代には既に足利世に流布してあるやうである

二学期

富商
河村瑞賢

一六　小蛇の疵

當時天下に雙なしといふ富商の子の、學ぶ友となりぬる事出で來しに、其の子いひしは、「我が父なる者の見まゐらせて、『必ず天下の大儒ともなり給ふべき御事なり。我が亡兄の娘の候なるに合せまゐらせ、黃金三千兩に求め得し宅地をもて學問の料となして、物學び給ふやうにと、某が心のやうに申せ。』とこそ侍れ。」といふ。

我此の事を聞きて、「御志の程忘るべからず。我むかし或人の申ししことを聞きしに、夏のころ靈山とかに遊びし者どもの中、池に足浸し居けるに、小（メコ）しき蛇の來りて、其の

足の大指を舐るあるが、忽ちに去りては、また忽ちに來りて舐る。かくするがうちに其の蛇やう〳〵に大きくなりしにや、後には其の大指を呑むばかりになりしかば、腰よりさまむとする所をあけさまに刺斬りたれば、うしろ様に飛去るほどに、家にかけ入りて障子をさす。伴なひしものすがを取出して、双の方を上になして大指の上にあててまつ。また來りて大指を呑

新井白石

ども、「何事にや。」といふ程こそあれ、石走り木倒れて、地震ふこと半時ばかり過ぎてのちに、障子を細目にあけて見けるに、一丈餘の大蛇の、唇の上より頭の方まで、一尺餘斬られたるが、斃れ死したりといふ事なり。その有りや無しやは未だ知らねど、今宣ふことに似たるところの侍るなり。初め其の蛇の小しきなりしほどは、僅にさすがをもて刺斬りし所なるが、既に大きくなりしに至つては一尺餘の疵とは成りしなり。われ今身貧しく窮りたれば、人知れる者にも非ず。此の身の儘にて、そこの亡兄のあとを承繼ぎなむには、その疵なほ小しきなるべし。若し宣ふ所の如く、世に知らるべき程の儒生ともなりなむには、

その疵は殊に大きにこそなりぬべけれ。三千兩の黄金をすてて、大疵あらむ儒生と成し立てられむ事は、謀を得給ひたりともいふべからず。たとひ刺斬るところの小しきなりとも、我もまた疵被らむことを願はず、我かくこそ申したれと答へ給へ。」といひたり。後に聞けば、然るべき儒生の、その娘にはあひ具せしなり。

此のことをも父にておはせし人に語り申しければ、「珍しからぬ事なれど、よき喩にもありつるかな。」と笑ひ給ひたりき、

（新井白石―折りたく柴の記）

然るべき儒生　黒川某といひ父祖ともに儒者として名のあつた人

父　新井正濟、久留里侯土屋利直の臣

新井白石　名：君美、德川初期の漢學者、德川家宣に仕へて幕政を輔けた享保十年歿、年六十九

一七　村岡局

嵯峨　山城國葛野郡太秦附近以西嵐山に至る汎稱

近衛左府　近衛忠熙

水戸前中納言　德川齊昭

村岡の局は名を矩子（クリ）といひて、京都の人津崎元矩の女なり。天明六年嵯峨のほとりに生れ、八歳の時、始めて近衛家に仕へけるが、年長ずるまゝによろづに賢くまめやかなるより、擢んでられて老女となり、村岡と稱せり。天性いと嚴かにして愼み深く、ことに勤王の志に篤く、いたく王室の衰へさせ給へるを悲み、常に志ある人々と親み語らひて、「國のためには身を失ふともいとはじ。」といへりとなん。

嘉永・安政の間、開國鎖港の論こもごも起り、互に挑み爭ひて、世の中漸く騷がしく、正議黨は近衛左府・水戸前中納言などを戴き、鎖港の説を唱へて、よそながら朝議を輔け奉

九條關白　九條尚忠
井伊大老　井伊直弼

家定　德川十三代將軍

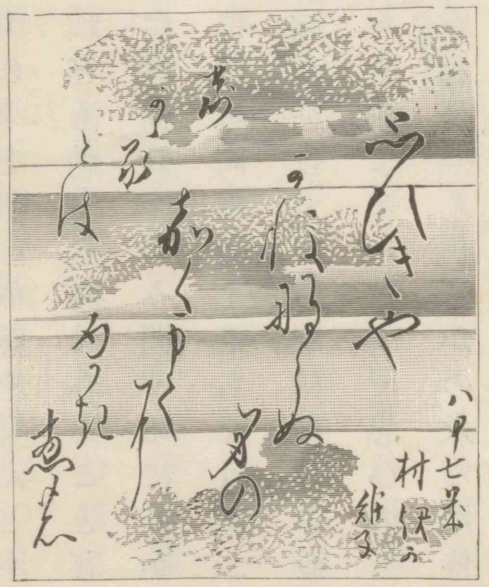
慶喜卿　齊昭の第七子一橋家を繼ぐ家茂の後を承けて十五代將軍となる、大正二年薨、年七十七

り、開國黨は九條關白・井伊大老などを首とし、幕府の議を贊け成し、如何にもして世界の樣を九重の奥に聞えあげ、勅許を得て、外國と交易の道を開かんと樣々に心を盡しけり。かゝる折柄、時の將軍家定公子なくして、世嗣いまだ定まらざりしかば、此の事はやく定めずば、おのづから人の心も動きて、安からぬ事の出でこんも測られずとて、安政五年、幕府にては世子を選み定むべき評議起りぬ。時に水戸の臣に安島帶刀、同京都留守居役に鵜飼吉左衞門、其の子幸吉、其の外薩摩の日下部伊三次・西郷吉之助など聞ゆる輩あり。尊王の志深くして、攘夷の念自ら止め難く、いかで勅命を賜はり、水戸前中納言の子一橋慶喜卿を將軍家の世子と定め、早く職をつがせまゐらせて、前中納言、將軍の父といふを以て後見したまはんやうにし、攘夷の事を果し叡慮を安んじ奉らんと思ひ立ちけり。されども勅命を賜はらんこと容易き事にあらねば、「こは偏に近衞公を賴み聞ゆるに若かず、公をたのみまゐらせんには、村岡の力を借らずば協ふべからず。」とて、まづ村岡を語らひけり。村岡は固より勤王の志深く、君の爲には身をも棄てなんとまで思ひ入りたる頃なりければ、いと易く諾ひて、「しかじかの人なん侍る。」と聞えて、左府に見參せしめたり。左府は此等の人々を延見し、深く其の志を愛でて、いかにもして本意遂げさせんと心を盡されける程

紀伊宰相
德川家茂

筆蹟
八十七歳村
たか矩子
思ひきや敷なくらぬ身のかくまでにふかき恵の露かゝるとは

に、直弼等は早くも紀伊宰相を世嗣に定め、水戸前中納言を始め、そを助くる人々を黜けければ、正議黨の心盡しは水の泡とぞなりにける。村岡は之をいみじう口惜しくおもひて、更に一策を案じて、朝に奏しけるに、帝その志をめでさせたまひて、やがて乞ひ奉りしまゝに、水戸前中納言に勅諚を賜ひけり。日下部伊三次・鵜飼幸吉等、それを捧げて東に下り、密かに前中納言に傳へけるに、隠れた



村岡局の筆蹟

間部詮勝
越前國鯖江の城主、老中となる、明治十七年歿、年八十三

清水寺
京都洛東清水にある、觀音堂

月照
清水寺成就院の住僧、玉井宗光の子、初名宗久、安政五年十一月薩摩に投じて、翌年四十六歿した

るより顯はるゝはなく、此の事早くも幕府に聞えしかば、直弼、閣老間部詮勝を京に遣はし、勅諚の事に與れる輩を嚴しく探り求め、遂に鵜飼父子を始め、尊王攘夷を唱ふる輩數十人を捕へて江戸に送らしめたり。時に安政五年十月にして、世に戊午の難といふもの是なり。

是より先、京都清水寺の僧に月照といふものあり、これも尊王の志いと深きを、近衛左府いたくめでて、常に近侍せしめられ、村岡も年來いと親しく語らひけり。然るに、「鵜飼等もろともに追捕せらるべし。」と告ぐる者ありければ、左府いみじう悲み惜みて、西郷・村岡等に謀りたまふ。みなみな心をやましめけるが、やがて西郷が、「暫く身を潜め

て時を待たるべし。外にはすべも候はじ」といふまゝに、偏に彼に打任せて、しばし鹿兒島に隱れて事をさまるを待たしめ給ひける程に、かしこにても幕府の追捕きびしくして、え潛みあへず、同年の十一月に、遂に薩摩潟の藻屑となりにけり。

その明年正月ばかりに、京都町奉行の廳より村岡を召しければ、いかなる事ぞとて、直に行けるを、其のまゝにとゞめられけり。これも亦正議黨に與せし咎なりけり。

さて二月の末つかた、江戸に送られ、又の月、松平丹波守の館にあづけられぬ。秋になりて、鵜飼等もろともに、白洲とか、ゆゝしき處に引出でられて、鵜飼等を助けて勅諚下

賜の事を贊け成しし罪を責め問はれけれども、村岡少しも恐れたるけしきなくて「何事も、老のけのあさましさに、悉く打忘れたり」とのみにて、何事を問へどさらにいはねば、司人たち困じはてて、更に「汝が主なる左府殿には、日ごろ何事をして明し暮し給ふ」と問ひしに、「女の身は外樣の事は知らず」といひて答へざりけり。これ皆主家に煩をかけじとの心しらひなるべし。司人また「左府殿には、此の頃とかく政にたづさはり給ふと聞ゆるはまことか」と問ふに至りて、村岡は容を更めて「あやしくも問はせたまふものかな。近衛殿は藤原氏の長者にて、官は左大臣におはしますを、國の政にあづからせ給ふは言ふもさらな

大御臺所　將軍家定の夫人

り、さのみいぶかり給ふべきかは。と理りせめて詰りければ、司人返すべき言葉もなくて止みつ。

さて日頃經て、いよ〳〵罪科定まりて、三十日ばかり籠められけり。其の程はかしづきをあまた附けられて、衣裳なども、六日七日毎に新にとゝのへて着せられけり。さるは時の大御臺所入輿の折、村岡よろづ後見まゐらせしかば、之に報い給へるなり。かくて九月に至り、罪免されて、十月京に歸り、又もとの如くに近衞家に仕へたりけるが、慶應二年、老いて今は宮仕もなりがたしとて、里にまかりて、嵯峨の奥に直指庵といふ庵を結びて、いみじう行ひて住みゐたりし程に、明治五年、太政官より其の王事に勤めたる績を賞し、終身現米二十石を賜ふ由仰せ下され、のどかに老をやしなひ、貧しき人を惠みなどして、樂しく月日を送りけり。

此の間に、西鄕隆盛がしば〳〵此の庵におとづれ來りて、過ぎにしかたを語らふことあり、或時は懷舊の涙に袖をしぼり、或時はをさまる御代にあひぬるを喜びつゝ、八十路の坂を越えても、猶すこやかなりけるが、明治六年八月、八十八にて身まかりけり。後に尊王を唱へて王政復古の基をたてける人々に、位階を贈らせ給ふ事あり。村岡も明治二十四年十二月に、從四位をぞ贈られける。

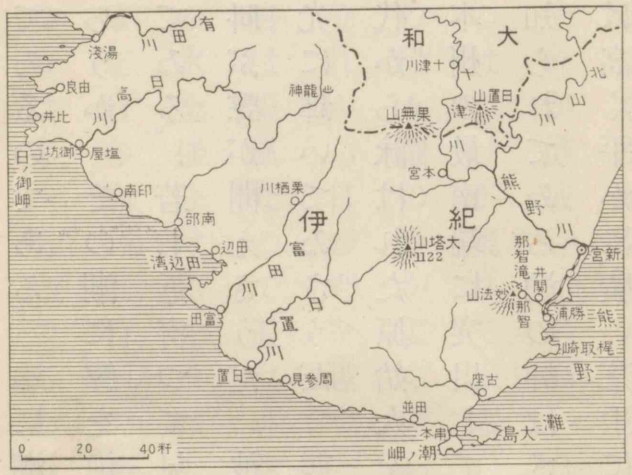
（日本の婦人）

那智山
紀伊國東牟婁郡那智にある熊野三所權現の一

一八　紀三井寺へ

那智山に詣でる爲に乘つて來た船に、私はまた乘つてゐる。往きには雨天であり浪も高かつたので、沿岸の風景にも眼をとめずに過ぎたが、けふは天氣も好く、船室の上の散歩甲板に出ると、風が涼しい。そこに並べてある籐椅子が、自然にすうと動き出して、向側の手すりまで吹寄せられたりしてゐる。

勝浦を出たのは朝の八時半だつた。今日は非常にはつきりと海上から見える那智の瀧にも「おさらば」をして、再び見る日があるかどうかと思ふ。



梶取崎をまはる時、船はかなり搖れた。船長は「これは浪が高いのではありません。うねりです。」といふ。浪の色は著しく濃くて、ねつとりとした粘りを持つてゐるやうに見える。浪がしらに白い水沫の出來るのも、重い浪と浪とが摩擦して白い光を發するのではないかと思ふ程——沖を見ると、如何に風いでゐるといつても、うねりは高い。近くを行く帆船でも船體は浪にかくれて、白

帆の七分位だけが水の上に見えて、そのまゝ走りつゞけてゐるのである。殊に潮の色の濃いのは黒潮の流であらうか。その潮に、鰹を漁るのか、船を並べて漕ぎはやつてゐる。若し近寄つて見るならば、漁夫等の艫を押す聲、叫ぶ聲が聞えさうだ。彼等の赤銅色の裸體が、初夏の日光に輝いてゐさうだ。熊野の灘の中に勇魚（イサナ）を追ふと、古代から詠はれた原始人を祝福したい氣がする。

勇魚　鯨の古語

本州の最南端に突出して居り、この航路の最難所として知られてゐる潮の岬は、さしたる事もなくて過ぎた。岬は高く平かに、廣い芝生になつて、白く塗られた燈臺の堂堂としてゐるその背後には、雲の峰がむく〳〵と、確に夏

を描き出してゐる。御坊といふ所にも船は寄つた。渚が長く、松原が續いてゐるばかり。洲の間が川口らしい、それが道成寺で名高い日高川であらう。そこから荷役のはしけが現れて來る。町は見えないで、海に向つた山の段々畑の麥がよく赤らんでゐる。

道成寺　紀伊國日高郡矢田村大字土生にある道成寺の緣起にもとづいて作つた謠曲

それから日の岬を越すと、もう紀州の西海岸になる。今日は東風なので、浪は非常におだやかになつて、一面の光の水を掻分けるやうにして船が和歌の浦に着いたのは、まだ日の高い五時頃であつた。

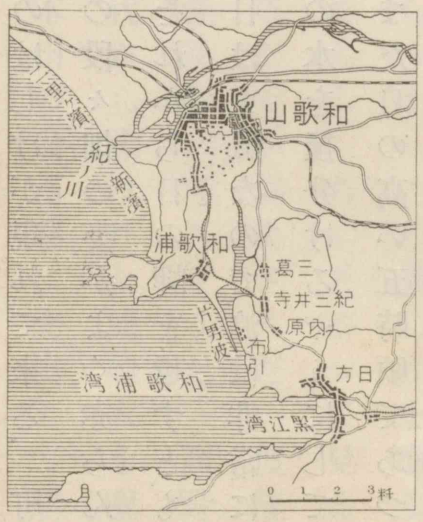
和歌の浦　紀伊國海草郡景勝の地として名高い

こゝは案内を知つてゐるので、私は堤添ひに片男波に出で、玉津島神社・浮島の前を堀割に添うて行つた。紀三井

玉津島神社　和歌の浦にある神社、祭神は衣通姫とつたへる

紀三井寺　同郡紀三井寺村にある、西國巡禮第二番の靈場

寺の本堂の屋根と多寶塔とが、正面の岡の茂りの中に、くつきりと象箝されたやうに仰がれる。



本宮　紀伊國東牟婁郡本宮村、熊野三山の一なる熊野坐神社がある

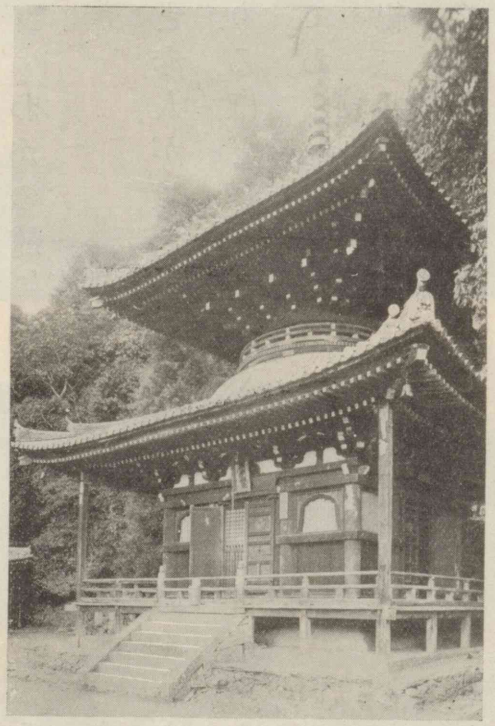
湯の峯　同郡同村、溫泉が出るので古來本宮の所轄であつた

行願の爲に乘物を用ひない人々は、那智山より本宮・湯の峰をかけ、熊野街道といふ紀州の山路を越えて、田邊に出て海に遭ひ、御坊・井關・宮原を通つて、こゝ紀三井寺までのおゝ、御堂が見える。その佛をたづねて長い旅をして來て、やうやく彼方の高みにその莊嚴を見出したといふ喜びで、自然に足が早められるやうな氣持である。今でも

長き日をの句　長き日を囀りたらぬ雲雀哉（芭蕉）

三十八里半を歩くのである。

松林には月見草が咲いてゐる。今夜も遲い月があらう。日はもうすつかりかげつてゐる。


多寶塔

麥畑がある、雲雀が啼いてゐる。「長き日を囀りたらぬ」といふやうに、少しの日あしをも惜んで啼いてゐる。五歩に十歩に、御堂の影がはつきりと仰がれて來る。廣い川に出る、長い橋が二つ繼い

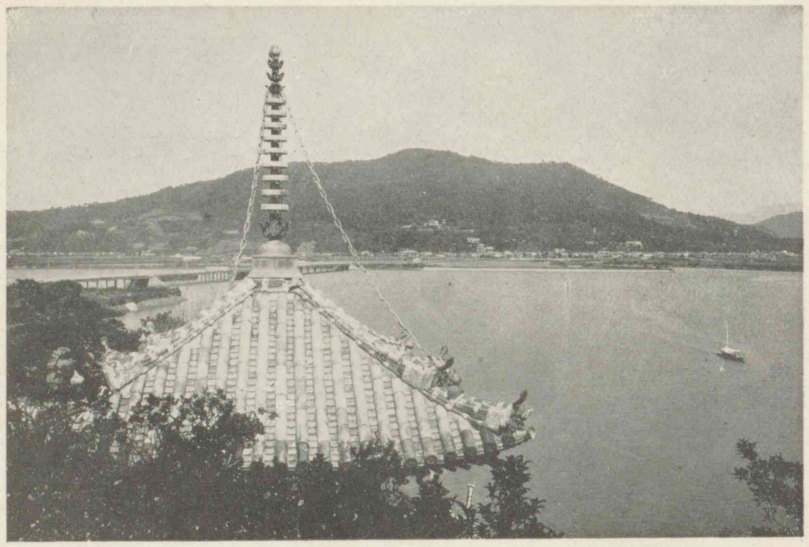
赤人　山邊赤人、萬葉集時代の歌人で、柿本人麿と並稱せられる、神龜天平頃の人

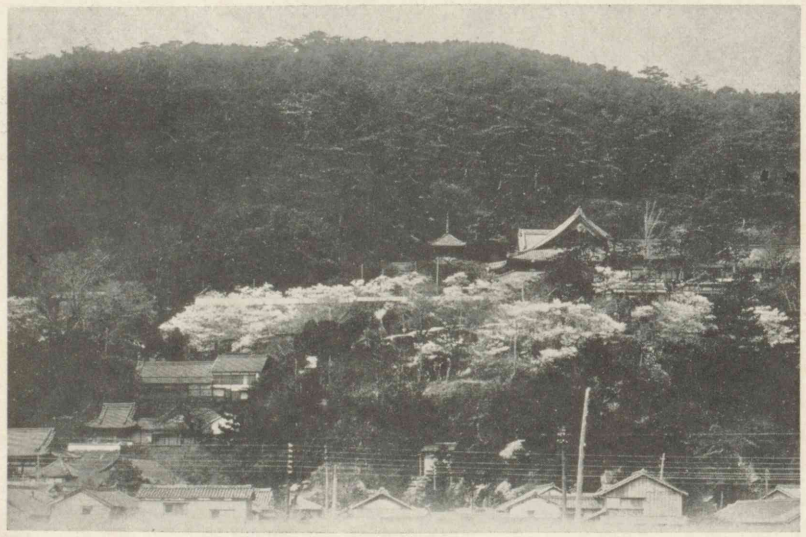
で架つてゐる。和歌川である。川をはなれても蘆が生えてゐる。この邊に蘆の多いことは、

わかの浦に潮みちくれば潟をなみ
蘆邊をさして田鶴鳴きわたる

と赤人が詠んだ萬葉時代からの事である。今は鶴が下りるほど長閑でなく、蘆原には電車路もあつて、蛙が鳴いてゐる。

紀三井寺の山門は、山門らしいがつしりした作りではなく、美しいすらりとした姿であるが、そこから正面にかゝる急な石段に對して、強く嚴めしい感じを和らげて、淨境に親ませる氣持を起させる。石段の階數が百八十六と、

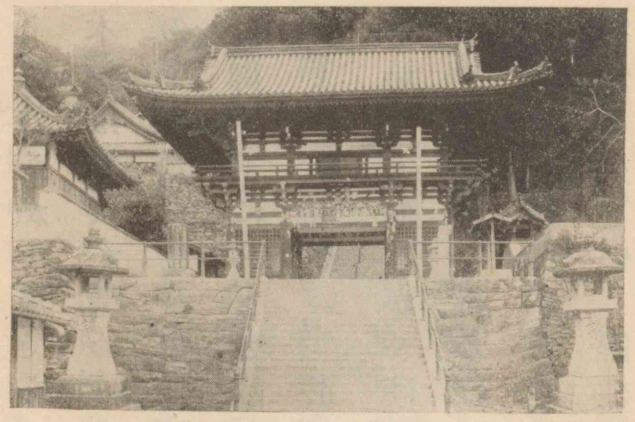




和歌の浦と紀三井寺

宗雪　江戸時代の畫家、尾形光琳の弟子であつたが、その死後狩野派を學んだ

私の持つ細見記には書いてある。境内は櫻が多いが、其の木々はすべて葉櫻になつて、すがすがしくもあれば靜でもある。登りきつた處に楠の大樹が一本、これもよく茂つて、目にたゝぬやうな花が其の下の地上に散りこぼれてゐる。ほの〴〵と夏の匂である。



紀三井寺山門

御手洗堂には宗雪筆の龍が、鉢の水にうつつて泳ぐやうだつたと傳へるが、その姿も今は薄くなり、殊に日暮れの光で淡く

なつてゐる水に私は手をすゝいだ。銅蓮をこぼれる滴りの音がかすかである。

本堂は屋根が深めに垂れてゐるので、夕暮の色が一層深い。内陣は御格子に蔀をさげて、拜して窺ふよすがもない。正面に「救世殿」といふ大額をかゝげて、兩手でやうやく動かし得るほどの太い綱が、大きな鰐口から垂れてゐる。香爐も大きい。露柱もどつしりと太い。堂は十一間四面といふ。本尊は十一面觀世音

紀三井寺本堂

菩薩である。

私は拜し終へてから、繒馬堂に立つた。巡禮たちのために、床几を置き茶釜と茶碗とが出してあるが、私が此の日の最後に詣でた者であらう。こゝから和歌の浦の全景が一眸の中に收められるのは佳い。左手に一筋虹の如き細い地峽が、きれいに松を並べてゐる。右手にはむつくりと低い丘が重なつて、そこにも松が多く、中に小さな社か寺かを包んでゐさうな風情である。空は幾分曇つて來たが、雲の間ににじみこんだ夕陽の赤さが、まだ消えきらずに、潟の水をこんがりと染めてゐる。遙に夢のやうな淡路の山――。

地上を巡禮するものの淋しさが、ひし〳〵と胸に迫つてくるやうな夕である。何處へ行つても一人の我が身が、自分ながらいとしくなるやうな夕である。

私は太陽を信じよう

私は太陽を愛さう

私もひとりである故に

太陽もひとりである故に

かつてそんな詩を誦んだことがあつた。旅にあつては太陽にたよる外はない。太陽こそ慈悲そのものである。「如日虛空住」と、觀世音菩薩の威德をたゝへた言葉にも唱へるではないか。

コ　ジツウ

如日虛空住　法華經普門品第二十五にある句。念彼觀音力、如日虛空住」とある

あすの日――あすの太陽に輝きあれ！　私はさう念じて、とつぷりと暮れ沈む西の空に合掌した。それから再び長い石段を下りた。今夜は蛙の聲に圍まれたやうな宿を得て、靜に眠りたいものだと思ひながら――。

（荻原井泉水―西國巡禮紀行）

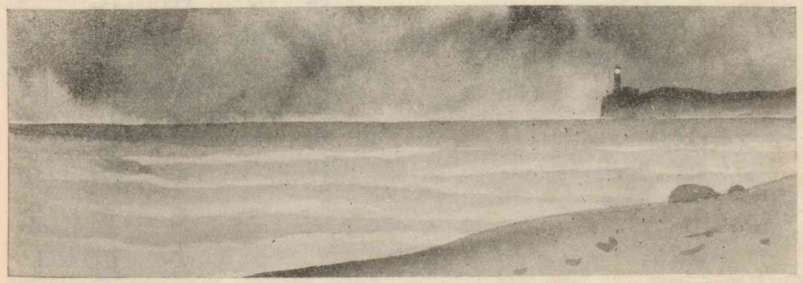
荻原井泉水　名は藤吉　俳人

一九　ゆふべの濱

ゆふべの濱
いさりぶね歸りつくして
人もなし夕ぐれの濱
松林風たかく吹き
一人ふむ眞砂つめたし

やうやうに汐は滿ちそめ
うすやみの中に音して
波頭ましろく碎け
足もとに泡ぞひろごる

沖はいま夕立すらし
なるかみのほのかに響き
かさなれる雲をとほして
いなづまの千條こそ散れ



西條八十
詩人
早稲田大學講師

今朝ゆきし岬のかなた
青白き光はめぐり
燈臺の火ぞいかめしく
暴風雨ちかき海をばまもる

（西條八十）

二〇　製紙工場　その一

清淨な、さうして莊嚴な大伽藍。
空氣は沈靜し、天井は高く、光はほの青い何かの陰影と織りまじつて、冷え冷えと、さうしてあかるく、幾つかの室內は次から次へ見通しに廣い。さうしてまた場外の外光

が遠く小さく、正方形に白く眩ゆく切りひらかれてゐるのだ。

そのとつつきの本堂とも云ふべきところに、高さ百吋以上の巨大な鐵製の機械が、二列に、間を廣くあけて並んでゐた。如何にも均齊を保つた配置であつた。それらの凡てが、また極めて摩訶不思議な生命力の威嚴を顯現してゐるのである。

靜中の動、動中の靜、兼ね備へたこれらの紙漉機械のあらゆる細部の機關、細きもの、平たきもの、圓き、綱狀の、腕型の、筒の、棒の、針金の、調革の、それらがひとしく動いて、光つて、流れて、搖れて、廻つて、幽かな幽かな微妙な複雜音と、製紙

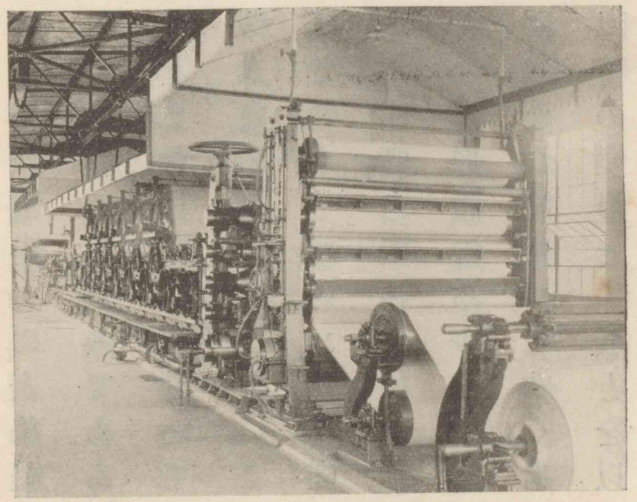
特有の淸らかに、爽かに、鮮かな芳香と氣分とを發して、目に見えぬ電動力の表象體そのものとしての絶間なき活動を續けてゐるのである。

何とまた、其處らに動いてゐる靑服の人々の、さうして參觀人なる私達の小さいことだ。私達は啞然として見上げてゆく。セメントの床を踏む靴音をさへ愼んで、さうして叩頭(オジギ)してゆく。

あの固形體のパルプが、ねと〳〵の綿になり、乳になり、水に濾され、篩はれてゆく次から次への現象の、また、如何に瞬時の變形と生成とを以て私達を驚かした事か。

あの鈍色(ニビイロ)の液狀のパルプが、次の機械へ薄い〳〵平坦面

を以て流れて落ちると、次の機械では、それが何時のまにか薄紫の、それは明るい上品な桐の花色の液となつて辷り、長い網の、また丸網の針金に濾されて水と纖維とに分たれ、殘された纖維はまた編まれて、吸水函に入り、こゝでいよ〳〵水分が除かれると、たちまちの間に、その次では既に幅廣の紙らしく光澤めき固まつて來て、次のまた強く熱したローラーの幾つか



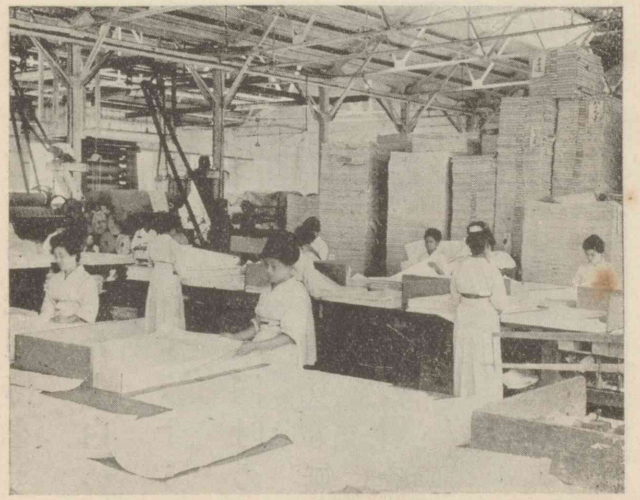
抄紙機

に卷きつき卷きつき、そのローラーを蔽うた毛布の上を通されるその幾廻轉をもつて、遂に最後の乾燥を了ると、はさはさ、さわさわと、白い白い音と平面の光とを立てながら、こゝにすうすうすうと閃めき出して來る。すつとまた切られて同型同吋の長さとなつて、一枚一枚と、大きな卓上に、寸分の謬りも無く、はらりはらりと辷り止つて、積り積つて、またその層を高めてゆくのだ。

二一　製紙工場　その二

積まれ積まれる白紙は、所定の高さにかさむと、目の廻る速度で取去つて、そこへまた奔つて來ては乘る白紙に對

して備へねばならぬ。人間の手よりも紙の辷りの迅さは、それこそ人間をそこで幾廻轉させることか、想像のほかである。それどころでない。それが實に無量の、また極度の迅速生産である事實が、次の室へ移つても、幾百の女工の手ん手古舞で知られる。



製品檢査

若い女たちも、實に機敏で手馴れたものである。數列の卓に向つて並んで、手頃に重ねた幅廣い白紙の層を、ちよいと片端へ右の手の指を觸れると、はら〳〵〳〵とめくる。その速さには驚く。また、破損紙を見出す直覺的の眼と、指の確實さと、速さにも驚く。だが、如何なる彼の女らでも、後から後からと送られて來る生産力のそれには、絶えず追つ立てられ、じりじりさせられ、慄へさせられ、しまひにはへと〳〵にされて了ふ。

裝包

こゝにまた、碧い包裝紙を擴げ、檢査された完全紙の層を、どしりどし〳〵と載せ、重ねて、揃へて、整へて、またぱたぱたと四方から包み、さつ〳〵と糊刷毛で掃き、レッテルを貼り、押し、叩き、次の荷造場へ送る中年の女の活躍もめざましい。

ところでまた、見てゐる間に破損紙が天井に屆くばかりに積まれ高まつてゆくのにも、私は目を瞠つた。私は一人の小男が、雪山のやうに高い、白い破損紙層を背に負つて、この大伽藍の中を匍ふやうに動き出したのにも驚いた。考へて見ると空と空とを孕んだ紙の層は、いかに高くとも、實に輕々としたものにはちがひない。だが

あまりの不釣合ではないか。おゝ、紙の入道雲が歩く歩く、光り輝く紙の雪山が。

そこで、原料叩解機に移る。そこの山と積んだパルプの層がまた瞬く間に、その大腹中に吸ひ込まれる。と、どろどろの綿狀になり、纖維になり、液狀になつて、また紙漉機械へ流れ入る。桐の花色の寒天體になり、乾燥し、また紙に還る。

戰場のやうな騷ぎはまた荷造りにもある。然し此處にも、誰として一の私語すら發する餘裕を與へられてない。事實空氣は沈靜してゐる。たゞ機械の威力がこの工場の空間のあらゆる隅々にまでも及んでゐるのだ。あの

無量生産から寸時の隙なく引きずられこづき廻はされてゐる人夫たちの、沈默の苦力と繁忙とは見る目も痛はしい。

壓搾機がある。既に包裝され、レッテルを貼られた紙の數連が送られて載る。ぱた〳〵とん〳〵と四方に板を當てる、蓋をする。針金の位置が定まる。すうと壓搾機が下りる。ぴしやんこになる。そら函が出來た。よろし。運搬臺が來る。がら〳〵、走り出す。また紙包が來る。ぱた〳〵、とん〳〵、すうつ、がら〳〵〳〵。それは寸時の休みもなく繰りかへされるのである。

私たちは畏怖と驚駭と感歎と、絶大の壓迫感と、崇拜とを

數連　一連は五百枚

北原白秋　名は隆吉　詩人

上高地　日本アルプスの南部梓川の上流の高原、海拔五千尺

島々　長野縣松本市の西四里餘

德本峠　島々から上高地に至る途中の峠

以て外へ出た。

夏、夏、夏。

「あゝ、青空だ。」

私はほつとした。

雲が見えた。山の綠が、さうしてポプラのそよぎが燦々と光り、街の屋根が見え、青い海が見え、檣が見え、私たちの高麗丸が見え、あゝさうして、白い鷗の飛翔が見えた。

（北原白秋―フレップトリップ）

二二　上高地の靜境

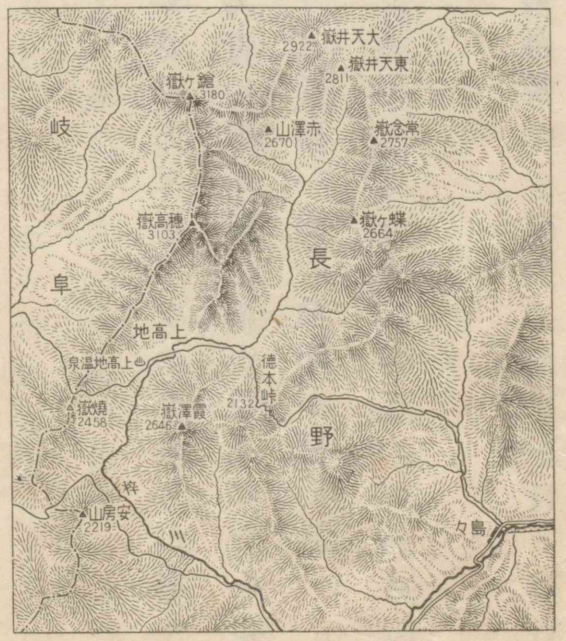
島々から四里の林道を登つて德本峠の頂に出ると、白雪

カラマツ
落葉松

穂高　上高地の北にある山、三峯よりなる

常念山脈　日本アルプスの一支脈で、上高地の東北に連る

を頂いた穂高の秀麗な連嶺が俄然として現れ、常念山脈の豪宕な姿が強い色彩で描かれてゐるのが見える。そして三里の上高地の高原は、整然とした木立の裝で全溪谷を埋めてゐる一方を、梓川の清流が穂高の裾について白くうねつてゐる。二十町餘も下つて上高地に下りきると、溪聲があちらこちらに聞えて、道は樅や落葉松や栂



焼が岳　上高地の西方にある火山

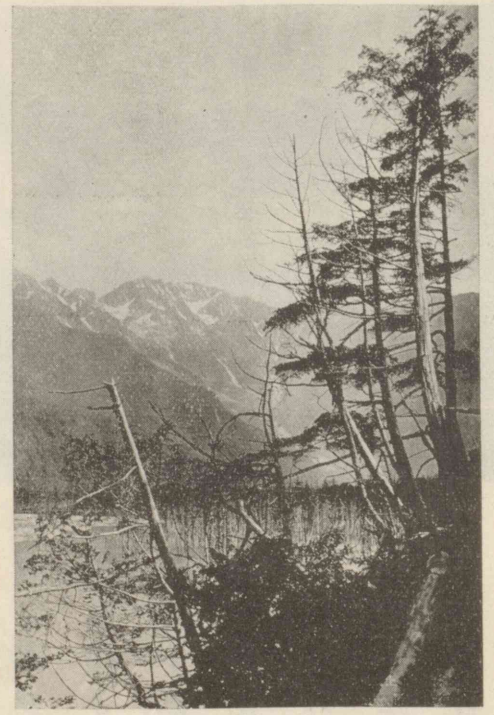
霞澤岳　上高地の東南徳本峠につゞく山

の淋しい株を分けていくのである。

穂高の氣高い姿と、落葉松や白樺のえもいはれない色彩と、清澄な梓川がその間をくゞつてゆつたりと流れる情趣とは、上高地峡谷の最も飽かぬ眺である。行手に焼が岳の二筋三筋の寂しい噴煙を眺めながら、樹間を辿ること七八町で、溫泉旅館の建物が現れて來る。梓川の流はこゝでは一際ゆるやかに、向岸の柳の林が次第高に、白樺となり栂となり落葉松となつて、やがては秀麗な霞澤岳と聳えて清淨な景色を作つてゐる。その流るゝ水、川向ふの柳の林、漂ふ雲、それらを見るだけでも無限の情趣が味はれる。まして旅裝を宿に解いて、息もつきあへぬ程

に變化するこの溪谷の自然の色彩と活動とを眺めるならば、わが心の忽ちに淨化されて行くのを感じるであらう。

朝の上高地を味はうとする者は、まだこの溪谷に朝日のさゝない五時頃、宿の欄干によつて梓川のほとりに眼を轉じなければならない。先づ眼に入るものは霞澤岳である。秀麗な峰頭から滴り落つる綠の色は、流れて針葉樹や濶葉樹の林となり、ゆるやかにうねつて對岸の柳と白樺と落葉松のゆつたりとつゞく林となる。この林から川面にかけての一帶の薄靄は、いまかすかに搖り動いてゐる。と見れば雄偉な燒が岳は、その東の半面を薔薇

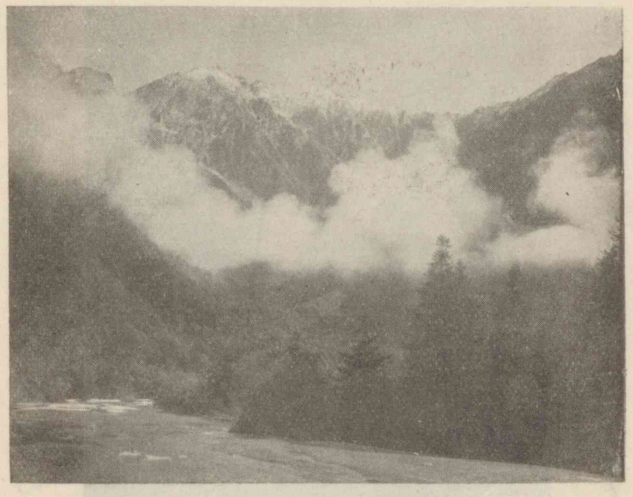


河童橋
梓川にかゝる

に染めてゐる。噴煙は今しも眠から醒めたかのやうに靜な曉の空へと立昇るのである。

暫くすると德本峠から旭が昇つた。朝靄が溶けるにつれて、上高地一帶の溪谷が俄に銀のやうに明るい光を漂はせて、梓川の川面がきら〳〵と光つて來る。しかし河童橋から德本峠へかけて、密林にとざされた約一里の間の

冷たい空氣は、まだ溫められずに、氷のやうな流がその底を山裾に添うて流れてゐる靄はあとなく消えて、山膚の皺が殘りなく現れた。見渡すかぎりの溪谷は、綠に黃をまぜて霞が連嶺の八合目あたりを隱した。耳を澄ませば溪谷の曉は靜で、たゞ潺流の音が聞えるばかりである。



上高地の朝

だん〳〵日があがる。しかしこの溪谷にはかしましい蟬の聲や、いつも聞馴れてゐる鳥の聲はない。この溪谷の朝夕を通じて最も多く聞くのは、鶯の聲と時鳥の聲である。中にも時鳥の聲は、人は何處に住んでも悲しい生活から逃れられないといふことを告げるかのやうに、この峽間にも啼いて行く。繪を描く人やそゞろ歩きの人が歸つてしまつて、その足痕のみが淋しく殘つてゐる梓川の岸をさすらふ夕に、眞に斷腸の思あらしめるのはこの鳥の聲である。晝、二階の欄干にもたれて、屋根の上に餌をあさる鶺鴒の姿を何心なく眺めてゐると、思ひがけぬ時鳥の聲の梓川の流聲に消えて行くのに、憂ひ心地のふと誘はれるのも折々である。

上高地の美は、雨によつて殊に發揮されるのである。雨の上高地は、いままでの翠綠の溪谷をして、俄に黃金の色どりに變ぜしめる。雨の日欄干によつて、霞澤岳から梓川の岸の柳の林にかけて、この溪谷の物象がいかに移りかはるかをつく〴〵と眺めよ。一條々々の雨のけぢめが、平地よりは一層明瞭なこの溪谷の雨は、先づ煙のやうなしぶきを横になびかせる。梓川の岸の林は見るまに萠黃色がまさる。あたりの爽かな空氣は一層その度を增して來る。この時溢れる溫泉にとびこんで、窓から霞澤岳を眺めながら空想にふけるのも興味が多い。やがて夕暮近く雨が止むと、雲が盛に動いて霞澤岳の峰頭が

時々雲間に立つ。が、見渡す溪谷の底には靄が滿ちて來る。ぱつと谷が明るくなつた。しかしそれは靄が晴れたのではない、夕日が靄にうつつたのだ。この時のこの溪谷を充たす色彩の美しさは、平地の朝夕のみを知る人人にどうして想像できよう。湧きかへる溪谷全部の卵黃色――これがその靄の色をあらはす極めて不十分な言葉である。

上高地の急激な雷雨に經驗のある人は、その光景を更に印象的なものの中に數へる。その起るや極めて咄嗟である。忽ちにして霞澤岳の峰頭が濛々と煙ると、はや殷殷たる雷聲が全溪谷を震駭する。火柱が山の頂から林

にかけて立つ。無數の雨脚が雲を貫いて一齊に溪聲の鳴をとゞめる。しかし暫くして明るさが增して、雲がきれぎれになつて日光が洩れて來る。すつかり晴上つた後までも、二片三片の雲が、柳の林に歸途を忘れてさまようてゐる。そして雨の後の林の色は萠黃にゆらいで、今にも樂の音となつてとけ出しさうである。

日中の上高地は、珍らしい溫泉場の光景を呈する、昨夕迎へた幾十の人々、それらは何處へ行つたであらうか。或人は湖水のほとりへ、或人は穗高の眺を貪らうとして河童橋の附近へ、或人は槍が岳へ、そして或人は梓川の岸に竿を携へて往つてしまふ。この時はこの溫泉の最も

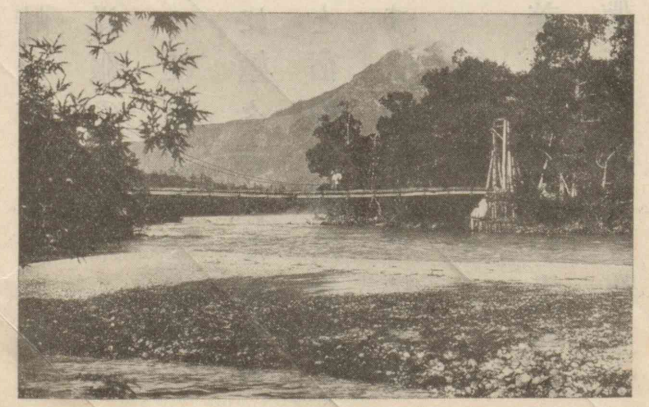
槍が岳　穗高岳の北に立つ嶮山

閑暇な時である。女中は洗濯をする。男は掃除をする。殘つた二三の客は緣側に日なたぼつこをしながら、梓川の流のまにまに心を泛べる。美しい鄙歌の聞えるのは女中のすさびである。追分や、松前や、幾百年の人の愁情もこの溪谷の淸寂な自然の姿にふれて、一層哀愁の氣を帶びてゐる。

追分節
松前節

夕暮、宿の前にたゞずんでゐると、時鳥の聲が頻にうしろの林をさまようてゐる。宿の後

梓川と河童橋



から流れて來て浴槽の傍で淀んでゐる流に、岩魚を釣る客が二三人絲を垂れてゐる。徳本峠の方を見ると、柳と栂との林から人夫がやつて來る。洋服の人が來る。若い女の學生が來る。外國人が來る。そしてこの溪谷へ入るどの人もが抱くところの、希望に嬉々とした顏色を泛べて來る。これらの人々が着くと、宿の玄關は急に忙しくなる。草履の音が廊下にやかましい。浴槽に話聲が高まる。

月夜の上高地は、想像しただけでも美しい。月の上らぬ前に、先づ霞澤一帶の峰が明るみを帶びて來る。暫くすると白い太い光が、白銀の矢のやうに斜に谷をこえて穗

高の連峰にそゝぎかゝる。それから漸く月が山の端を出る。その月は、夏でありながら平地で見る十月の色である。谷の底の流も林も薄靄に包まれて、美しい光の衣をかける。かういふ夜の物靜けさ。雨戸を引かない部屋には秋かと思ふ月の光がさしこんで、唯隣室の鼾聲とせゝらぎの音だけが枕元に落ちる。この時、人は、自分といふもののさゝやきが、今まで氣づかなかつた姿で現れて來るのを感じる。月の夜の朝、私が相變らず欄干にもたれてゐると、隣室のフランス人が、

「昨夜は誠に結構な月でした。」

と日本語で話しかけた事があつた。

十月になると、四圍の峰巒に白い斑雪が見え初め、穂高から梓川にかけて、身ぶるひするやうな白く冴えきつた雪溪が出來る。その時自然は上高地を更に〳〵淨化させて、人間をよそに、その壯大なる美觀をほしいまゝにすることであらう。

（日本アルプスと秩父巡禮の文による）

二三　綠蔭閑話

「風流を樂む花圃ならで、後の畑、前の田の作物に志し、自ら鍬をとりて耕し、先祖の賜と、命の親に懇を盡し、吉野の櫻、更科の月よりも、己が業こそたのしけれ。朝夕心をとめて打向ふ菜種の花は、井出の山吹よりも好ましく、麥の穂の色は牡丹芍藥よりも腹ごたへあるかと覺ゆ。朝顏よりも夕顏こそよけれ——」。

一茶（小林彌太郎、信濃國柏原の俳人、文政十年歿、年六十五）

と一茶が「勸農の詞」でいつて居るほどの意味でなくとも、眺め樂むといふ上からは、風流を旨とした花圃も、收穫を目的とした菜園も同じである。觀賞を主にした樹や草の栽培も無論結構ではあるが、心して菜園の美を味ふことも捨てがたいことである。

豌豆の花、胡瓜の花、茄子の花、さゝげの花、唐黍の廣葉、芋の葉の露、菜の花畑、麥の穂並、葱の花、何一つとして愛すべき趣を持たぬものはない。季節々々に變つてゆく菜園の眺めには、實利と享樂とのいみじき調和がある。收穫に

のみ心を奪はれて、自分の耕し培ふ田畑の美しさに、全然無關心である農夫がありうるであらうか。自分の植ゑた樹木の伸び榮えるさまをよろこぶ歡びは、決して單なる打算の結果ばかりではない。そこに農作にいそしむ心の健かさがある。

○

鮮かな綠色の葉蔭に、ルビーのやうな色をした苺の玉の鈴なりに實のる頃の苺畠の眺めほど爽かな氣持を與へるものは少い。わけて露にぬれた綠の葉をかきわけて、あのみづ〳〵しい紅玉を摘み集める五月の朝のすがすがしさは、多くの年中行事のうちでの最も嬉しい事の一つである。

わが庭になりし苺を今日もかも摘みてまゐらす永病む父に

これは先年、父の最後の病を看護してゐた頃の歌である。父の死後、私たちは毎年きまつて、苺の初なりをもぐことはそれを先づ父の靈前に供へることにしてゐるのである。

わが庭になりし苺の初なりをもろ手に盛れる今朝のうれしさ

露しげき葉をかきわけて朝な〳〵子等とわがつむこれの紅玉

今年もいつの間にか、苺のみのる頃となつた。苺畠の垣

の外には、昨日今日雛げしの美しい花が、細長い莖もろとも快い五月の風にゆられてゐる。雛げしの花の美しさは無論愛すべきであるが、私は更にこの花が、ぱら〳〵と惜しげもなくその美しい花片を振落した後に、くり〳〵としたけし坊主のあのあどけない實を結ぶ樣子を、妙にいぢらしく思ふのである。

○

夏の川釣も私の最も好きな事の一つであつたが、四年前の八月、五歳になる男兒を亡くしてから、その記念の爲に私は釣といふことをふつつりとやめてしまつた。死の前日まで私の釣のお伴をして歩いてゐたあの子を思ふと、私は今でも胸をかきむしられるやうに悲しい。彼の持つ小さなバケツの中へ水を入れてやり、二三尾の鮒を泳がしてやると、彼は何もかも忘れてそれを樂んで居たが、暫くして彼は何事にかひどく驚いたやうに、頓狂な聲で私を呼んでいつた。

「おとうちやん、鮒がバケツを食つてるよ」

なるほど、バケツの内側に口をつけてぱく〳〵やつてゐる鮒の樣子は、幼い彼の頭にさう思ふに十分であつた。釣に夢中になつてゐた私も、その奇拔な訴には、何もかも忘れて笑ひ興ぜずにはゐられなかつた。

彼はその日の夕方突然病み出して、その翌日の夕方には

もう此の世のものでなかつた。しかもそれは、妻がある近親者の訃に接して他行した不在中の出來事であつた。その子の名は元雄といつた。

わが元雄ながら心地よきわらひ聲ふたゝび聞かむすべなきものか

母の行き慕ひて泣きてとゞめ得ばかゝる歎きはせざらましものを

母を呼び母を待つだにあるべきをもだしていにしなれはいとしも

私がむちやくちやに好であつた釣をやめることの出來たのは、全くこの子のお蔭である。今ではもうその季節が來ても、釣の事など思ひ出しもしないやうになつた。私が釣をやめてから、不思議に私の子供たちも釣に行かなくなつた。因縁は妙なものである。

○愛兒の死を記念するために釣をやめた私は、父の死を記念するために、桐苗を少しばかり植ゑた。

ちゝのみの父がかたみのうら畑に霜月われは桐苗を植う

ましろなるをちの山なみながめつゝ桐苗を植う朝の畑に

それからもう五年過ぎた。桐は驚くほど成長した。し

かも私はこの春――たしか三月の十八日であつたと記憶する。私の愛飼してゐた三羽のチャボの骸を、そのうちの最もよく伸びた桐の根元に埋葬して、型ばかりの墓をつくつてやつた。

それらのチャボは、雛から育て上げた、とりわけ愛着の深いものであつたが、一寸の油斷から、夜中犬にやられたのであつた。私が彼等の悲鳴に愕いて目をさますなり飛出して行つた時には、まだもがき廻つてゐたのであつた。鳥屋の中へ入れてやると間もなく三羽とも死んでしまつた。

桐の木は年一年延びてゆく。チャボの墓標となつた一本は、とりわけ今年からよく延びることであらう。そしていつとなしに、かうした記憶も、忘却の底に葬られる頃には、その桐の木もおそらく誰かの手に伐られてしまふことであらう。

○

子供の書くものには、時々驚かされる。昨年の暮にも、一人の低能兒に近いといはれてゐる農家の男の子の書いたといふ、一篇の童謠めいたものに、ひどく驚かされたことがあつた。それは、

馬よ　馬よ
今日はねんごつけた

今日は早くからねんごつけた
くたびんたか　馬よ
早くまやへはいつて休んでくれ
またあした

といふのであつた。「ねんごつけ」は「年貢米を運ぶ日」といふ意味の方言、「まや」はうまや」の意「くたびんたか」は「くたびれたか」の訛である。受持の教師の話によると、この子はまるで流行の童謡などいふものを讀んだこともなく、どの學科に於ても成績の劣等な兒童であるといふ事であつた。それにこの「馬よ」と假に題される童謡も、行も句切もなくべロ〳〵と書きつゞけたものであつたのを、教師

の手で整頓して見たのださうである。

しかし、この純朴な數行の中に、何といふ溫かな情愛の流露してゐることであらう。「くたびんたか、馬よ」の一句の涙ぐましさ。「またあした」の一語のあたゝかさ。これこそ誠の農人の歌であると、私はしみ〴〵嬉しく思つた。主觀的に感情をのべたうちに、彼等の生活の姿がいみじくも描かれてゐる。

時雨空の下に黑くひらけてゐる刈田の荒涼たる景色が、私の眼に見える。その荒涼たる刈田の中に通じた凹凸の多い細道が、私の眼に見える。そのさびしい道を夕暮の寒い風に吹かれながら、終日の働に疲れた馬を曳いて、

自分も疲れた足を引きずつて、むかふに見える落葉した森がくれの村へとぼ〳〵歸つて行く少年の姿が、私の眼に見える。やがて夕闇の中で、ざく〳〵と藁を刻む音が聞える、とろ〳〵と煖かさうに爐火が燃えてゐる、薄暗い茶の間が見える。その爐端に、微かに聞えるさく〳〵といふ馬の藁を嚙む音に耳傾けながら、こくり〳〵と快い居眠をやつて居る、焚火に照された健康さうな少年の顏が見える。土間の据風呂に浸りながら追分かなんかを小聲で唸つてゐる男の聲も聞える。流しの方で、夕食に使つた食器を洗つてゐるらしい瀨戸物の打合ふ音もきこえる。さうした幻想がはてしもなく展開してゆく

相馬御風
名は昌二
小說家
文學者

ところに、この童謠の味ひがいよ〳〵豐になつて行く。私は永く、この名も知らない少年の詩を忘れることが出來ないであらう。

（相馬御風―綠蔭閑話）

二四　赤楊の家

この家の第一に氣に入つたのは、庭の廣いことであつた。そればかりでなく、庭のつくりが殆ど人工といふべき程の人工が加へてないことである。中央に青い高麗芝が生えてゐて、その芝の上には海邊の砂山に生えてゐるやうな小松が十本ばかりぱら〳〵と立つて居る。その小松の下や周圍には、一面に黃と赤の金鷄草が咲亂れてゐ

る。紫苑・鳳仙花・石竹・酸漿・芒・女郎花・小萩などが植ゑ交へられてゐる。青芝の前には小さいながら花壇もある。なほ庭の向ふには小さな畠が五六枚つゞいてゐる。苺畠から續いて、玉蜀黍畠・茄子畠・胡瓜畠・箒草畠・牛蒡畠とならんでゐる。その間のあき畑に、引越してから直隷白菜と小松菜とを播き、郷里から葱の根を持つてきて葱畑も一枚作つた。また馬鈴薯も新たに種子をおろした。少し方向を異にした茶の間に近いところには、これも小さな杉菜畑がある。これは、春、土筆をとるために作られたものらしい。庭の東側十間ばかりは、女竹の粗い垣根をつくつて、それに隱元が一面にからませてある。蔓には

青い莢がさがつてをり、白い花が點々として風に吹かれてゐる。其の垣根の傍には、屋根より高い古木の赤楊（ハンノキ）が、野生のまゝ空のもとに立つてゐる。さて、その隱元垣の向ふはといふと、深い下水の濠をへだてて、ちよつと廣い青草原になつてゐる。その草原のなかに、細い路が紐のやうにつけられてゐる。夕方などは、よくその路を浴衣がけの散歩の人がちらりほらりと通りの方に出て行く。また勤めがへりの白い夏服姿がステッキを脇はさんで、小形の本をみながら町から歸つてくる姿もみえる。白いパラソルや、蜻蛉つる子供の細い竿などもみえる。それに嬉しいことは、井戸水の量が非常に多くその質の

良くて、山清水のやうに清冷なことである。それから家の間どりも、技師が自分の家に建てたといふだけあつて、相當に便利よく建ててある。二階の八疊を客間にあて、二疊の玄關わきの四疊半を、私の書齋と透（トホル）の勉強部屋に當て、白い机掛けをした私の机と、素木の小さな子供机とが並べられてある。私等の部屋は開戸で廊下から通ふやうになつてゐる六疊の家族の居間に續く。そこには晝間は妙子の小さな寢臺がおかれてある。その居間の次が濡縁をめぐらした茶の間になつてゐる。部屋は二階ともあはせて僅に五間しかないがどの部屋もみな使へるし、玄關を除いた外の四間はみな庭に面してゐるの

透　作者の子

妙子　作者の子

で、風通しがよく、涼しいことは前の家からみると四五度も違ひさうだ。それに風がふいても埃のとんで來ないのが何より嬉しい。下の書齋は、午前と夜とが最も自分をして落着かせる。それに此の書齋は、他の部屋と全然壁で隔離されてゐるのでよい。

此處に引越してきてから、私は毎日二三時間は土に親むことが出來る。私は引越した翌日から、早速庭や畑の草とりをした。土の匂を嗅いで草をひく樂しさを、殆ど何年目かで味ふことが出來た。小さな錆びた鍬をもち出して、茄子畑の畝をつくつて肥料をやつた。苺畑に生えてゐた杉菜をすつかりとつてやつた。箒草の倒れてゐ

るのを直してやつた。白い筒袖の半襦袢をきて大きな麥藁帽を被つた私と、タオルの運動服をきたその子供とは、毎日眞黑になつて働き且つ遊んでゐる。いつか庭の隅の赤楊の下に圓い小山が築かれた。その小山の土をとつた跡に小さな池を拵らへて、そこに睡蓮を浮かせ、青蘆を生えさせる計畫をしてゐる。來月はその池にうす紅の花が咲くことであらうと思ふ。數年間飢ゑてゐた土に親む生活の出來るのは感謝に値ひする。土に親めるばかりでなく、此處では空にも親める。自分で築きあげた赤土の岡の上に立ちながら、大空の白い雲が風に吹かれて流れて行くさまをみてゐる心持は、ちよつと他に

リズム調子

見出せない。

越した三日目の夕方、赤楊に來て初めて蜩が啼いた。此の蜩の音をきくと、秋を感ぜずにはゐられぬ。「夕空晴れて秋風吹き――」といふ少年時代に教つた歌が、無意識に唇にのぼる。一種の哀感が空にながれてゐるやうに感ぜられる。夜になると、野の林の方で梟の啼いてゐるのが寂しくきかれる。もう草間には蟲がしきりに啼きだした。何といふ蟲か知らぬが、ぢいぢいぢいといふ細かい雨のやうなリズムが、夜になると草の間から流れそめる。淺草に行つて、歸りに買つて來た松蟲の籠を青芝の上においたら、寂しい音色で夜通し啼いてゐた。その音

をきいてゐると、どうしても秋だなと、思はずにゐられなかつた。

ある夕方、私は久し振りで透と二人で野の林に行つた。そして、その林のそばの青芝原で、二人で相撲をとつて冷たい芝の上を轉び廻つた。それから草原を夕日に横切つて家に歸つた。子供は片手に草の葉つ葉や草の穗を一握り、私は櫟の枝を一枝持つて來た。二人のからだは草の香に沁みてゐた。夕食をすまして、子供は蚊帳の中の小さな寢臺の上にまろぶと同時に、もう安心してねてゐた。私は書齋で手紙を書いてゐる。すると、妻が得意さうに微笑しながら入つてきて、「よいものをみせてあげ

ませう」といふ。私は妻の方をみた。妻は何か大事さうに握つた右手を左の手でさらに掩ふやうにしてゐる。私はちよつと好奇心をそゝられた。何だらうと思つた。妻が靜に開いた掌のなかには、思ひも及ばぬ螢が青く光つてゐた。私はたしかに驚かされた。

「どうしてか、蚊帳のなかにゐました」と妻も驚いてゐる。こゝに引越して來てから約二十日間もたつ。然し私は、こゝらに螢の光つてゐるのをみたことはなかつた。また螢がゐようとは思ひも及ばなかつた。しかもそれが、庭の草にゐたとか、空を低くながれてゐたとかいふのなら、「あ、螢がゐる」位にしか驚きもしない。唯それが蚊帳の

なかに光つてゐたといふので驚かされたのである。まさか蚊帳のなかで孵化されたわけでもあるまい。いかに吾々の家が、野原と同じであるとはいへ、螢の故郷にならうとは思はれぬ。私は妻に、子供の着物を寢卷に何處で着かへさせたかとたづねた。妻は直ちに、「蚊帳のなかで着かへさせました」と言つて少し眼をかゞやかせた。そして、二人は野の草原に小犬のやうに轉げて來た子供の着物に螢がついてゐたのだらうといふ暗示を同時に受取つた。私たちは敬虔な心に澄みかへつて、ぢつと妻の掌に這つてゐる螢を視た。自然の小さな恩惠を感謝せざるを得なかつた。

前田夕暮
名は洋三
詩人

妻は庭に降りて、青芝のなかに螢を放した。螢は露しとどなる草の葉のなかで、時折り涼しげに光つてゐた。その都度、草の葉が青く透いてみえた。

私も庭に出てゐた。空には白く天の河が流れてゐた。

「もう秋だな。」と私はしみ〴〵とした心になつて、竹の涼臺の上に腰をおろして、赤楊の上の空に視入つた。

（前田夕暮―綠草心理）

二五　世界の歌枕

大西洋の浪は、太平洋のとは稍〻違つてゐる。太平洋の浪は大きくゆるく打つ。大西洋のは、いつも天氣が惡い爲

か、とにかく稍〻小さく鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は澄んだ藍ではなくて、稍〻黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度が稍〻高くなるに隨つて浪の色淡く、入日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍〻あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

サンフランシスコ　北米合衆國カリフオルニヤ州の都府、太平洋岸に於ける最大貿易港

私の大浪に遭つたのは、サンフランシスコに着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄せ返るので、さしもの大船も木の葉の樣に動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味ふ事が出來た。大西洋の方は、一體に山なす巨浪は少ないが、米國を去つて五日ばかりの一日は、暴風雨に類した天氣に出遭つた。要するに海の景は取出でて人に語る事は難いが、一度經驗のある者が後日追想すると、單調のやうでも其の美は千變萬化である。これが實に究竟の歌枕。

ハワイ　北太平洋中にあつて十餘の群島から成るも王國であつたが、今は北米合衆國の領となつてゐる、首府をホノルルといふ

陸上の景色は土地に由つて著しい相違があつて、一般には言盡されぬ。ハワイの如き四時氣候を同じうして太平洋の樂園と稱せられる地に行くと、滿目の風光一變して、始めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ萠黃の色に見えて、それに椰子の株が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど

美しい。これからの人が歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が花のやうであつたのを記憶する。

又サンフランシスコの港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から、遙に眺めると、金門灣頭の大浪が港口に押寄せる有樣、水の屏風を立て廻した如く、海の上にも瀧が

ハワイの椰子

金門灣　北米合衆國の西岸カリフオルニヤ灣入口の海峽、サンフランシスコ灣往來の關門

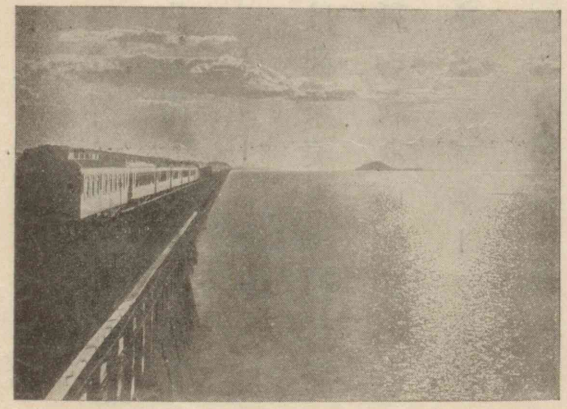
あるかとも疑はれた。是また歌枕に逸すべからざるものと思ふ。熱帶地方は云ふまでもないが、歐米の風光は日本に比して、いたく趣を異にしてゐる。かの國には、我が國よりも草木が尠ない。日本の樣に松・杉が全山を蔽うてゐるといふやうな山は見る事ができない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみの樣な山の所々に、たま〳〵青々した樹木が十數本繁

つてゐるといふ風の景色が多い。私は冬枯の時候にアメリカの或地方を通過したが、實に人氣のない物淋しい廣漠の野を行く心地がした。

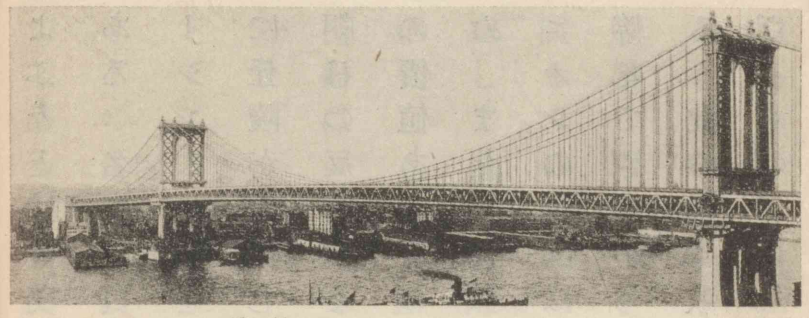
概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離れる數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振はいかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

さてアメリカの歌枕の一二を擧げて見よう。ワイオミング（合衆國の西部にある州）の平原の、眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルトレーク（合衆國ユター州に在る）の鹽の湖を中斷するルーシンの長路を通ると、平原の間に丘陵が起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、これ亦歌枕の價値あるものといはねばならぬ。またコロラド（合衆國の西南部キャニオンの河流、有名なる峽谷を形造る）の北、所謂キャニオンの一部は、奇岩大石路傍に轉じて、さながらの鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸すべからざるものである。さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意

ソルトレーク



ブルークリン　ニューヨーク市にある一八七〇年から約三十年かかつて竣工した長さ五六〇〇呎の釣橋



ニューヨークの長橋

味を廣くして見たいと思ふ。卽ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街煤烟の立昇る工場の光景なども、亦詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へばニューヨークの摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居る物がある。ブルークリンの釣橋の上からニューヨークを望むと、建て列ねた大厦高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階三十階の窓の燈が、

ホボーケン　ハドソン地方の一市

ニューイングランド　合衆國東部の人口稠密なる一地方

空の星かときらめいて輝く。又ホボーケンの港口、朝霞の景色夕暮の色、他の國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈〻好箇の歌枕がある。

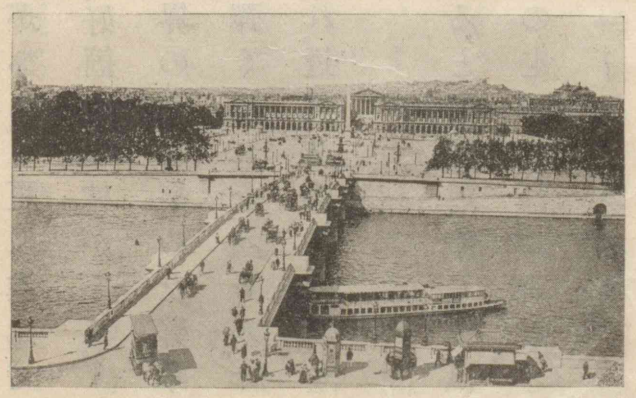
ニューヨークはマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、イタリヤの移民が彈く哀れなバレル、オルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂かとも聞える。

之とは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉は落盡した楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學生徒の走つて行く所などは、「若き米國萬歲」の聲を發した位、ニューイングランドの田舍の景色は落着いて若々しい、如何にも懷しい感を與

へる。歐米の大都會の中、どこが好いと問はれたなら、誰も誰も賞めるのはパリであらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふところに住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所と思ふ。シャンゼリゼーの大通りは、實に長安の盛時もものかは、端麗高雅、世界第一である。歌枕はどこにもごろ〳〵してゐる。文明の最高に位するのはフランスである、そし

シャンゼリゼー　パリ市の大路

長安　支那陝西省の首都、今の西安府、周・秦・漢・晉・隋・唐皆此に都した



セーヌ河

てパリである。それで極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌの河の邊りに、悠然綸を垂れた隱君子もある。橋の下には犬の理髮店がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他ノートルダム寺の建築は、ゴシック式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總べての變化を味はうと、一日一晩の間眺望した事もあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黃金の光の波を浴びた景色をサンミシェール橋から眺めた。又夜のしらじらあけに、朝風の心地よく頰を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた樣な色から、薔薇色のはでやかなのに至

セーヌ河　パリ市を貫流してイギリス海峽に注ぐ

ノートルダム寺　パリ市内の大寺院

ゴシック式　歐洲にて中古時代に流行せし一種の建築樣式

サンミシェール　セーヌ河に架けた橋の一

るまでの色合の、微な影を味ふことが出來る。其の外花を賣る老媼の風、シアルロットの帽を被つて、ボールの箱をかかへた店通ひの賣子の姿、ペルシロンといふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてた後に雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り馬車は軋る不夜城の壯觀、滿目の時勢粧、皆歌枕ならぬはなき趣である。

シアルロット　帽子の型の名

ロンドンは景色の點では餘り人が賞めぬが、色彩の變化や其の色合の豐な點はターナーの繪にある通りで、風俗美は尠ないが、光線の變化ばかりは味ふ價値がある。しかし同じく風光を味ふにしても、住心地よいパリの方が、あらゆる旅客の賞揚する所である。唯ロンドンにも、テームス上流のリッチモンド邊からの兩岸の景色には、イギリス特有の美觀が現れて居る。此の他風車・朱い屋根・清い淀に名あるオランダもよく、イタリヤにはナポリ邊

ターナー　英國の風景畫家（一七七五―一八五一）

リッチモンド　ロンドンの西方九哩にある町、同名の丘の上にある

ナポリ　ナポリ州の首府、同名の灣に臨む

ザルツブルヒ　オーストリヤの西部、東アルプス山脈の北邊、山水秀麗の地

紅海　アラビヤとアフリカとの間にある細長い海

の夢の様な景色もよい。　スヰスは風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南ドイツを採る。南ドイツのザルツブルヒの景は、日本によく似てゐる。要するに、何處が一番風光が絶佳であるかといふ問題は、一概には定め難い。　見る人々の心によつて、天下到る處如何なる處と雖も、皆相當の美は味はれるものである。浪の激しいイギリス海峽の船の上でも、暑さ堪へがたい紅海の甲板でも、見る心によつてそれ〴〵の美しさが感ぜられる。　元來歌枕などと取出で定めるのは、或は間違つてゐはしまいか、天下皆歌枕ではあるまいか。　私の旅行は學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帶びたので

上田敏　文學博士　英文學者　大正五年歿、年四十三

も無い。　たゞ漫然と飄遊したので、感覺を通して印象を捉へただけである。

（上田敏―心の花）

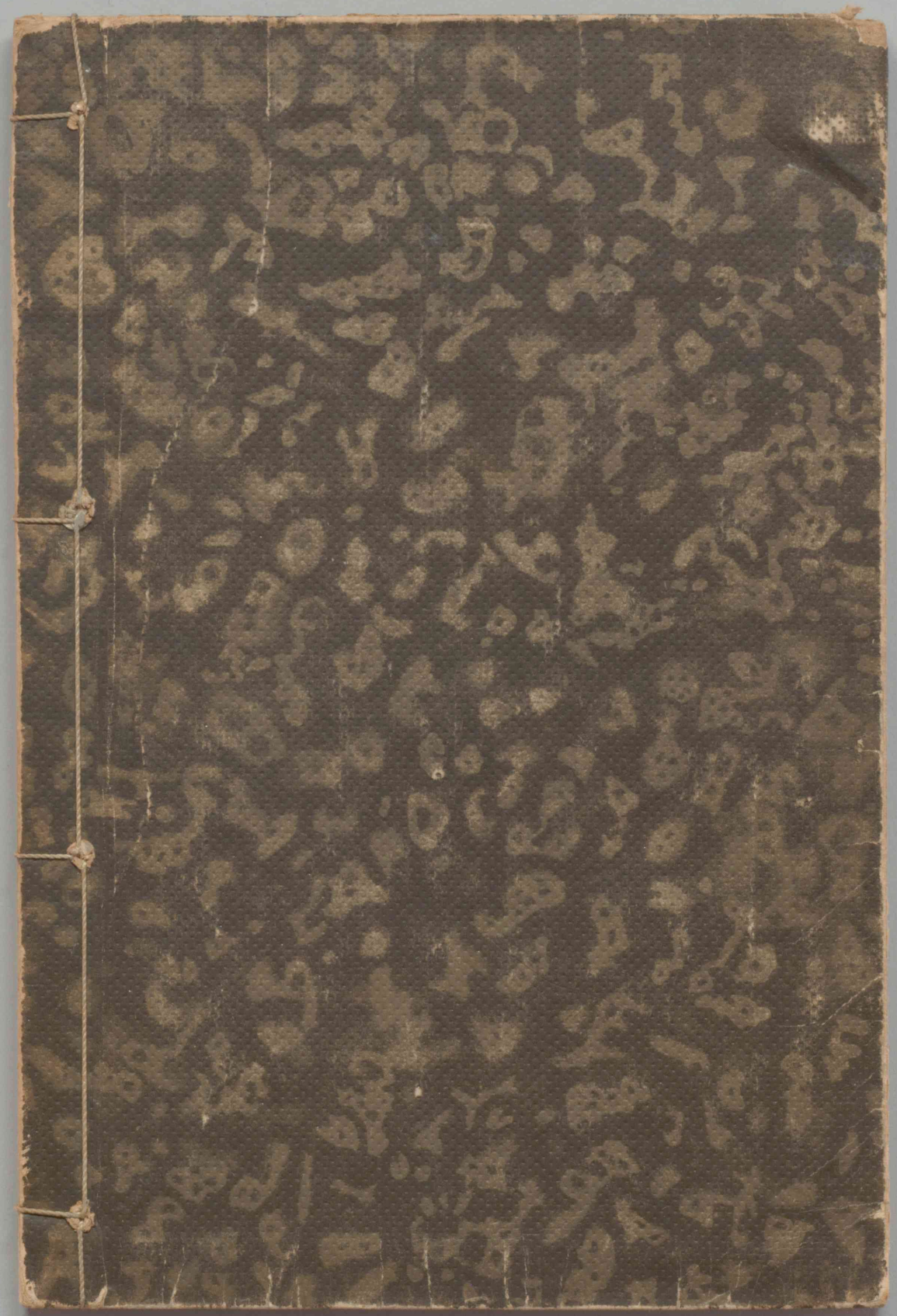
昭和女子國文讀本　卷五　終

大正七年九月廿八日發行
大正十二年一月廿二日修正版發行
大正十四年一月十日第二修正版發行
昭和三年八月十日第三修正版發行
昭和三年十二月五日第三修正版訂正印刷
昭和三年十二月十日第三修正版訂正發行

著作權所有

著作者　東京市外中野町字大塚一六二五番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社　育英書院
印刷者　東京市神田區錦町三丁目十七番地　白井赫太郎
右代表者　倉田八十八
印刷所　精興社

發行所　東京市牛込區白銀町二十九番地　合資會社　育英書院
振替口座（東京）七四二番
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　目黑書店
振替口座（東京）二八〇九番

昭和女子國文讀本　全十册

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
一・二・三・五・六	金四拾五錢	各金七拾參錢
四・七	金四拾六錢	金七拾五錢
八	金四拾壹錢	金六拾七錢
致用上	金參拾九錢	金六拾四錢
上級用下	金參拾七錢	金六拾錢
	金參拾六錢	金五拾九錢